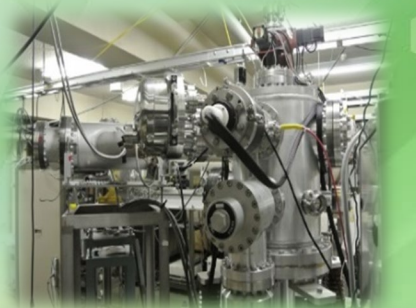
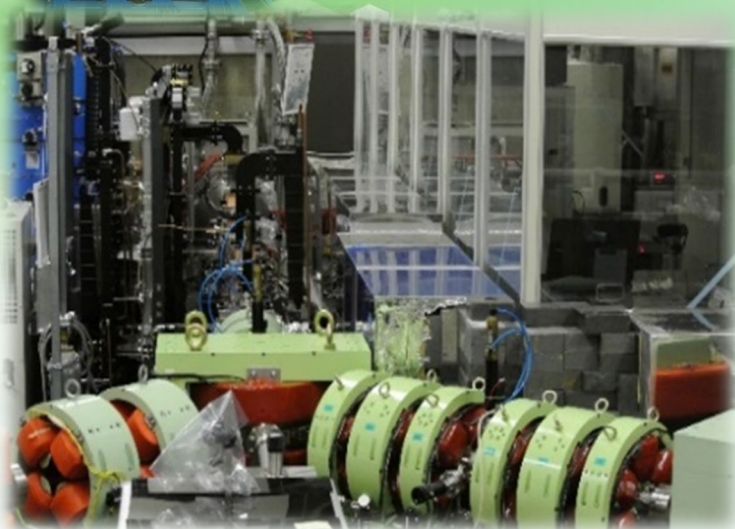


150 MeV
S-band
electron
Linac



Laser
photocathode
RF-gun S-band
Linac



大阪大学産業科学研究所
附属量子ビーム科学研究施設

2021 (R3) 年度報告書

2021 Annual Reports
Research Laboratory for Quantum Beam Science
Institute of Scientific and Industrial Research
Osaka University



Co-60 γ -
irradiation
facility



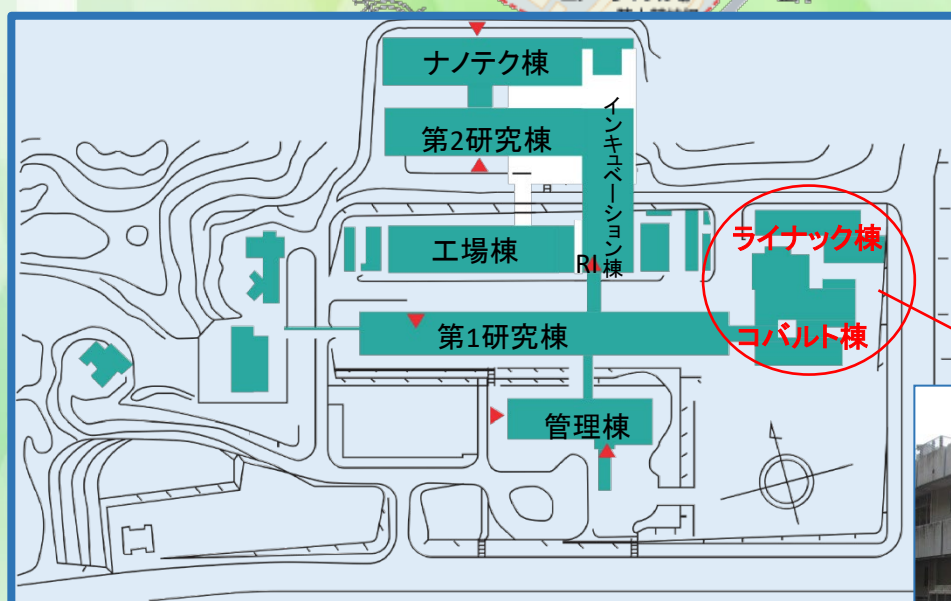
L-band
electron
Linac



大阪大学産業科学研究所附属量子ビーム科学研究施設



産業科学研究所建物配置図



量子ビーム科学研究施設



大阪大学産業科学研究所附属量子ビーム科学研究施設
 〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘8-1
 TEL : 06-6879-8511 FAX : 06-6875-4346
 URL: <https://www.sanken.osaka-u.ac.jp/labs/rl/>
 Mail: info_rl@sanken.osaka-u.ac.jp



目 次

1. はじめに	1
2. 量子ビーム科学研究施設の現状	
2-1 Lバンド電子ライナック.....	2
2-2 150MeV Sバンド電子ライナック.....	4
2-3 フォトカソードRF電子銃Sバンドライナック	4
2-4 コバルト 60 照射設備	6
2-5 共同利用採択テーマ一覧	7
3. 研究成果報告.....	11
4. 年間行事報告	
4-1 研究会報告	40
4-2 委員会報告	41
4-3 見学者リスト	44
4-4 学生実験報告	44
5. 放射線安全管理報告	
5-1 放射線安全管理報告	45
5-2 電子式個人線量計の校正試験	46
6. 研究成果リスト.....	49
7. 量子ビーム科学研究施設員名簿.....	57

1.はじめに

量子ビーム科学研究施設の2021年度の活動と研究成果をお届けいたします。今年度も昨年一昨年に続く新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けたものの、施設利用や共同研究利用の一時停止をすることなく、所内、学内および、学外の研究者に多数利用いただくことができたのは幸いです。以前は普通に実施されていた対面での研究会やセミナーは全てオンラインでの開催となりましたが、これまでの災禍の大きさを鑑みると、最小限の影響で済んだのではないかと思います。

ビーム施設の主要装置は、Lバンド電子ライナックと、SバンドRF電子銃ライナック、Sバンド150MeV電子ライナック、コバルト60ガンマ線照射装置です。Lバンドでは、ナノ秒とサブピコ秒領域でのパルスラジオリシス法による化学反応と物質・材料科学の研究、創薬に関する基礎研究、自由電子レーザーによる高輝度コヒーレントテラヘルツ波の発生と利用が行われました。RF電子銃では、フェムト秒領域の短時間パルス電子ビームの発生に関する利用が行われました。コバルト60は、物質や材料から生物試料に対するガンマ線の照射実験に利用されました。

ビーム施設は、世界最大強度の電子ビームやテラヘルツ波および世界最短時間幅の電子ビームの利用が可能であり、また、今となっては数少ないコバルト60ガンマ線照射装置を有したユニークな研究施設です。これらは、所内、学内、学外に量子ビーム利用科学のための貴重な基盤的環境を長きに渡り提供してきた一方で、設備・装置の老朽化や維持経費等の問題が山積しています。そして、近年は、産研所内の量子ビーム施設将来構想ワーキングからビーム施設の新規研究展開への変革を求める答申が出されるなど、ビーム施設はたいへん厳しい状況にあります。本年は概算要求の施設整備の獲得に奔走する一方で、補正予算によるライナック棟改修工事が採択された場合に備えてライナック棟建屋改修工事の設計作業を開始しました。今後も当研究施設関係者スタッフ一同は新規展開に向けた努力を続けながら、同時にユーザーの皆様へのサービス提供を可能な限り継続し、当研究施設のユニークなビーム施設の運営と活発な利用を維持していく所存です。これからも当研究施設ユーザーのみなさまと関連研究者コミュニティからの厚いご支援を賜りますようお願い申し上げます。

大阪大学産業科学研究所量子ビーム研究施設長 細貝知直

2. 量子ビーム科学研究施設の現状

2-1 強力極超短時間パルス放射線発生装置(Lバンドライナック)

2-1-1 Lバンドライナックの運転状況

図1は、令和3年度におけるLバンドライナックの運転日数を、月別、モード別に表したものである。今年度のLバンドライナック共同利用では、14件の量子ビーム科学研究施設 共同利用研究課題と7件の物質・デバイス領域共同研究拠点 施設・設備利用課題が採択された。前期は保守作業の22シフトを含む119シフトが配分され、後期は保守作業の22シフトを含む120シフトが配分された。保守運転を含む運転日数は233日、運転時間実績は2756時間であった。

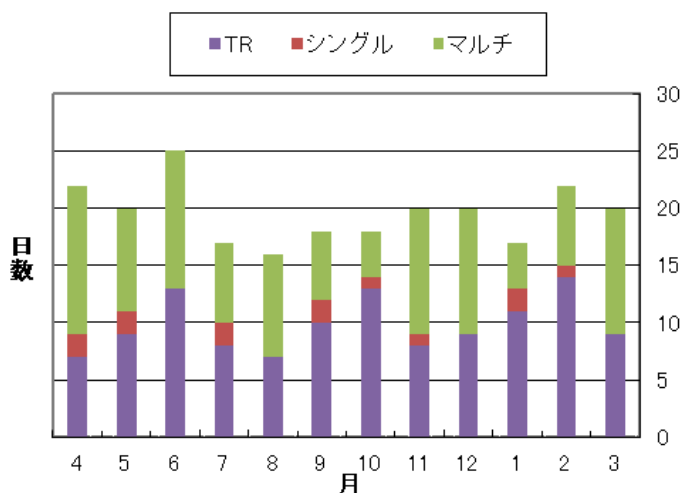


図1 令和3年度Lバンド運転日数

2-1-2 保守および故障の状況

● 振り分けシステム

電子ビーム振り分けシステムの使用に関する原子力規制庁への申請が承認された。それに伴い、重量扉とビームシャッターのインターロックロジックの変更、状態表示板の更新、振り分け制御プログラムの導入を行った。照射室とタイミングシステムの整備を継続しており、利用実験に提供できる体制を整えている。

● 半導体スイッチ

半導体スイッチの放電ノイズによる基板故障対策として自己給電式のゲート基板を開発し、昨年度3月に設置したもののスイッチングが不安定になる症状が発生していた。高繰返し且つ長時間の運転によるFETやサイリスタの温度上昇が原因であると疑い、光絶縁が可能な熱電対で温度測定をしながら運転を行ったが、問題になるほどの温度上昇は確認できなかった。その後、制御基板とサイリスタを固定するネジに緩みがあり、放電が起きていることが確認されたので、締め直しを行った。またゲート基板内の温度上昇検知部がノイズで誤動作してスイッチングが停止することが分かったので、該当箇所を補修した。これらの処置により正常に利用できることが確認できたので、6月よりクライストロンモジュレータに組み込んで利用実験での使用を開始した。

その後、950時間のマシンタイムに無故障で使用することができたが、10月下旬に設置当初と同様にスイッチングが不規則になる現象が発生した。自己給電回路の最上流の逆流防止ダイオードが故障して、過電流により下流の素子も連続的に故障することが判明したので、逆回復時間の

短いダイオードに交換した。12月末に改修した半導体スイッチを設置し、試験運転で問題ないことが確認されたが、1月下旬のマシントimeで再度故障した。現在、原因の追究を行っている。

● FEL

FEL 共振器のデチューニング用の電動 X 軸ステージが昨年度故障したので、新しいステージに交換して運用していた。運用開始から数日のマシントime使用でエンコーダが故障したため位置フィードバックを無効化して手動コマンドで運用していたが、さらに数日のマシントimeで手動コマンドも受け付けなくなった。新機種は放射線耐性が低く、高線量な発生装置室での使用には適さないと判断した。そのため、ステージ内部のエンコーダが故障しているものの手動コマンドを受け付ける従来機種を再度設置し、利用を続けている。

また共振器の角度調整用のエンコーダ付き DC モータータイプのアクチュエータも故障が頻発していた。そのため放射線耐性の高いステップモータタイプのアクチュエータを新たに用意し、試作工場に取付用のジグと放射線遮蔽用の鉛カバーを製作してもらい、共振器に設置した。

● 電磁石電源

偏向電磁石電源の内 1 台で、数か月単位で徐々に設定値とモニター値が乖離し、消磁プロセスが終了しない問題が発生していた。製造業者に現地調査と修理を依頼し、内部基板の AD・DA コンバータ回路のゲインが低下していることが判明したので、基板の修理を行った。

ヘルムホルツコイル用の電源の内 1 台で、運転中に出力が停止する現象が発生した。リモート制御に問題があるものの、リモート制御ケーブルをつないでモニター値を読み込める状態で出力をローカル制御にすれば、問題なく運転できることが判明した。半導体不足の影響で修理に半年程度の期間が見込まれたのでローカル制御での運転を続けていたが、症状が悪化し完全に通信ができない状態になると他のヘルムホルツコイルのリモート制御もできなくなることが判明した。当該電源を修理に出すため予備電源と交換し、同一通信系列上のすべてのヘルムホルツコイルをローカル制御に切り替えて運用している。

また他のヘルムホルツコイル用の電源の内 1 台も運転中に出力が不安定になる現象が発生した。修理不能と診断されたため、予備機と交換した。さらにステアリングコイル用の電源の内 1 台も通信不良が発生することから、通信基板の交換を行った。当該基板の修理は可能であったが、いずれの電源も納入から 20 年程度かそれ以上経過しているため、予備機の整備や更新を進める必要がある。

● その他の保守作業

その他の保守作業として、冷却水システム清掃・整備、圧空ラインのリーク対応、信号発生器の交換と代替機の実験測定、線源付きエリアモニターの廃止とそれに伴うインターロック修正、重量扉駆動系の整備等を行った。

2-2 150 MeV Sバンド電子ライナック

今年度4月は昨年度発生したクーリングタワー用循環水系統についているゲートバルブの交換作業及びフィルターの交換を行い運転可能となった。一方、昨年度から起こっているエネルギーアナライザー用のベンディングマグネットの電流制御回路が、放電ノイズのために誤動作する問題は、結局制御回路の電源を別のコンセントからとることで取り敢えずは誤動作しないようにできた。電源ラインから入ってくるノイズ処理が必要である。そのほかはSF6ガスのリーク量は依然大きいものの、2時間程度はガスの補給なしで運転できるため、陽電子ビームの発生実験に利用した。168時間程度の運転時間であった。

2-3 フォトカソード RF 電子銃 S バンドライナック

2-3-1 運転状況と主な研究成果

今年度には、高周波 (RF) 電子銃を駆動するピコ秒レーザーが故障中であるため、主に「40MeV S - バンドレーザーフォトカソード RF 電子銃ライナック」を利用したフェムト秒・アト秒超短パルス電子ビーム発生と THz 計測に関する研究を行い、「MeV 電子顕微鏡」を利用したフェムト秒時間分解電子顕微鏡の開発に関する研究を行った。以下に、それぞれの研究内容と得られた主な研究成果を示す。

- (1) 「40MeV の RF 電子銃ライナック」を利用したフェムト秒・アト秒超短パルス電子ビームの発生には、電荷量の制御による空間電荷効果の低減、加速管におけるエネルギー変調の高精度化を行った。発生したフェムト秒短パルス電子ビームを用いて、レーザー変調電子ビーム圧縮実験、スミス・パーセル放射実験、電気光学結晶による電子ビームのテラヘルツ計測実験を行っている。
- (2) 「MeV 電子顕微鏡」の研究に関しては、①電子ビームの輝度を向上するために、電子線パルスの繰返しを今までの 10Hz からクライストロンモジュレーターの最高性能である 30Hz に増やして、電子ビームの平均電流値を 0.5nA まで増強できた。②構造変化を引き起すための励起光パルス光学系を構築した。それは、Ti:Sapphire レーザーの 3 倍波 (UV : 266nm) 変換器から残された 400nm と 800nm のフェムト秒光パルスを再利用し、電子顕微鏡の試料室に伝搬する光学系を製作した。また、励起用光パルスとプローブの電子線パルスのタイミングを合わせるために電子線パルス発生用の UV 光の光学系も再構築した。それらを利用した時間分解構造変化の観察を行っている。

2-3-2 保守および故障の状況

電子ビーム発生用の Nd:YLF ピコ秒レーザーの 2 か所の故障が 2019 年度に発生していたが、復旧を完了した。2020 年度に、レーザー発振器部の半導体可飽和吸収ミラー (SESAM) の代替品を導入し、外部 RF に同期して CW mode-locking できる状態になった。2021 年度に、再生増幅器周りの修復を行った。新たな増幅用 Nd:YLF 結晶の選定と治具の設計をフラクシ社に依頼した。現在は、発振器からの基本波を増幅できる状態になり (1047 nm, >1.2 mJ/pulse, 10 Hz)、周波数変換により発生した四倍高調波 (262 nm, 170 μJ/pulse, 10 Hz) を電子ビーム発生に使用できる状態で

ある。取り外した古い Nd:YLF 結晶のブリュースターカットの表面には、調整時もしくは使用時にできたと思われる傷があり、十分な再生増幅ができなかった原因と推測される。

フェムト秒レーザーの発振器内の Ti:Sapphire 結晶を励起するための CW レーザー (Millenia Vs J, Spectra-Physics, 532 nm, 5 W) が故障しかけている。2003 年頃に導入された装置であるため、機器の更新を進行中である。

冷却水装置について、ライナックの電子銃および加速管、フェムト秒レーザー発振器のためのチラーを、SMC 社製の装置へ更新を行った。

2-4 コバルト60照射設備

2-4-1 概要

コバルト 60 ガンマ線密封 RI 線源 3 本を保有し、各線源での γ 線照射の利用が可能となっている。

2-4-2 利用状況

令和 2 年度のコバルト 60 照射施設の利用課題数は 21 件であった。利用状況を表 1 にまとめた。引き続きコバルト 60 線源が広く利用されている。

表 1 令和 3 年度コバルト 60 照射施設利用状況

部局	利用課題件数	総利用時間(hrs)
産業科学研究所	6	190
理学研究科	1	5
レーザー科学研究所	1	5
工学研究科	3	1240
拠点利用	4	131
他大学等	6	234
合計	21	1804

2-4-3 装置の維持管理

コバルト照射施設運転制御システムの総合点検および保守整備を令和 4 年 3 月に行なった。

2-5 令和3年度 共同利用採択テーマ一覧

2-5-1 共同利用テーマ一覧

採択番号	研究課題	所属	申込者氏名	利用装置
R3-C-1	ナノ秒マイクロ秒の放射線化学	産研	小林一雄	Lバンド/コバルト
R3-C-2	ナノ秒領域での量子ビーム誘起化学反応基礎課程	産研	神戸正雄	Lバンド
R3-C-3	EB/EUV用レジスト高感度化のための高速時間反応に関する研究	産研	神戸正雄	Lバンド/コバルト
R3-C-4	放射線化学反応中間体	産研	藤乗幸子	Lバンド/コバルト
R3-C-5	ラジカルイオンの反応性	産研	藤塚守	Lバンド/コバルト
R3-C-6	凝縮相中の量子ビーム誘起スパー反応研究	産研	室屋裕佐	Lバンド/コバルト/RF
R3-C-7	フェムト秒・アト秒パルスラジオリシスの研究	産研	神戸正雄	RF
R3-C-8	フェムト秒時間分解電子顕微鏡に関する研究	産研	楊金峰	RF
R3-C-9	フォトカソードRF電子銃における高輝度電子ビーム発生に関する研究	産研	楊金峰	RF
R3-C-10	Sバンドライナックを用いた陽電子ビームの生成・利用	産研	誉田義英	150S
R3-C-11	量子ビーム誘起によるナノ構造形成機構に関する研究	産研	岡本一将	Lバンド/コバルト
R3-C-12	量子ビーム照射による生体内での新規分子変換反応の開発と応用	産研	山下泰信	Lバンド
R3-C-13	電子線照射による物質制御	産研	入澤明典	Lバンド
R3-D-1	Lバンド電子ライナックによるTHz-FELを用いた固体励起状態の研究	産研/摂南大学 他	入澤明典/ 東谷篤志	Lバンド

採択番号	研究課題	所属	申込者氏名	利用装置
R3-D-2	自由電子レーザーを用いた化学結合状態の2次元評価技術に関する研究	産研/日本製鉄(株)	入澤明典/ 東谷篤志	Lバンド
R3-D-3	超分子の放射線化学	産研/九大工 他	入澤明典/ 西原克浩	Lバンド/ コバルト
R3-D-4	超短パルス電子ビーム発生とTHz計測	産研/三重大学	藤塚守/寫 越恒	RF
R3-D-5	加速器を用いた材料改質と新規機能性材料創製に関する研究	産研/阪大ダイ キン協働研究所	菅晃一/松 井龍之介	施設利用
R3-D-6	電子スピン共鳴(ESR)法による γ 線照射効果の研究	産研/神戸大学	菅晃一/大 島明博	コバルト
R3-D-7	コバルトからの γ 線を用いた新規機能性材料創製に関する研究	産研/阪大ダイ キン協働研究所	藤乗幸子/ 谷篤史	コバルト
R3-D-8	パルスラジオリシス、 γ 線照射を用いた放射線化学反応	産研/青山学院 大	菅晃一/大 島明博	Lバンド/ コバルト
R3-D-9	ヒト由来試料の匂い測定	産研	川井清彦/ 田邊一仁	コバルト
R3-D-10	放射性廃棄物からのエネルギー生産に関する放射線化学研究	産研/中部大学	立松健司	コバルト
R3-B-1	放射線反応場を利用したナノ粒子材料の合成	工学研究科	清野智史	コバルト
R3-B-2	ガンマ線照射における核融合炉材料及び透明材料のダメージ評価	レーザー科学研 究所	山ノ井航平	コバルト
R3-B-3	RF電子銃とプローブレザーを用いた、超高速電場計測手法の開発	レーザー科学研 究所	有川安信	RF
R3-B-4	高分子の放射線照射効果の検討	工学研究科 環 境・エネルギー 工学専攻	秋山庸子	コバルト/ 施設利用
R3-B-5	宇宙機用記機材の放射線試験・石英・ガラス アパタイト試料の放射線被ばく量の決定	理学研究科	山中千博	コバルト

採択番号	研究課題	所属	申込者氏名	利用装置
R3-B-6	3D プリンターによるプラスチック構造体の作製と放射線照射効果の検討	工学研究科 環境・エネルギー工学専攻	秋山庸子	コバルト/施設利用
R3-B-7	生体に対する高線量率電子線照射効果の研究	大阪大学大学院医学系研究科	西尾禎治	Lバンド

2-5-2 物質・デバイス領域共同研究拠点申込テーマ一覧

採択番号	研究課題	所属	申込者氏名	利用装置
R3-J-1	高強度赤外光照射による新規物質創成と新規物性発現	大阪大学 基礎工学研究科 未来物質領域	永井正也	Lバンド
R3-J-2	テラヘルツ FEL をもちいた非線形光学応答の研究	大阪大学 レーザー科学研究所	中嶋誠	Lバンド
R3-J-3	高強度テラヘルツ光照射による分子間相互作用の非線形励起と制御	量子科学技術研究開発機構	坪内雅明	Lバンド
R3-J-4	シンチレーションの前駆励起状態のパルスラジオリシスによる観測	東北大学大学院工学研究科	越水正典	Lバンド
R3-J-5	高分子系飛跡検出器内の放射線損傷形成機構	神戸大学大学院海事科学研究科	山内知也	コバルト
R3-J-6	フォトクロミズム分子の隠れた反応状態の研究	群馬大学大学院理工学府	山路稔	Lバンド/コバルト
R3-J-7	パルスラジオリシス法を用いた非均質反応場等での過渡現象に関する研究	日本原子力研究開発機構・廃炉環境国際共同研究センター	永石隆二	Lバンド
R3-J-8	蛍光性物質を利用した、時空間分解ダイナミック線量測定	埼玉大学理工学研究科	若狭雅信	RF
R3-J-9	テラヘルツ自由電子レーザーを用いた生体材料加工の研究	高エネルギー加速器研究機構	川崎平康	Lバンド
R3-J-10	光・電子デバイス応用に向けたガルバニック水中結晶光合成法による表面ナノパターン作製	北海道大学大学院工学院	高橋優樹	コバルト
R3-J-11	放射線エネルギーの電気エネルギーへの変換 -キャパシタ型ガンマ線電池の開発-	近畿大学理工学部	大塚哲平	コバルト

バクテリアおよび哺乳類一酸化窒素合成酵素反応 におけるプテリン-ヘム間の電子移動

阪大産研量子ビーム物質科学^a、佐賀大農学部^b

小林 一雄^{a*}、堀谷 正樹^b、伊藤(筒井) 裕子^a、古澤 孝弘^a

Different Rates of Intramolecular Electron Transfer from Biopterin to Fe^{II}-O₂ Complex in Nitric Oxide Synthases between Bacterial and Mammalian Enzymes

The institute of Scientific and Industrial Research, Osaka University,^a Department of Applied Biochemistry and Food Science, Saga University^b

Kazuo Kobayashi^{a*}, Masaki Horitani^b, Yuko Ito Tsutsui,^a Takahiro Kozawa^a

Nitric oxide synthase (NOS) is a cytochrome P450-type mono-oxygenase that catalyzes the oxidation of L-arginine to nitric oxide through the reaction intermediate N-hydroxy-L-arginine. The key process in the NOS enzymatic reaction is the reduction of a heme-oxygen intermediate (Fe²⁺-O₂) with cofactor pterin bound. We applied pulse radiolysis to *Bacillus subtilis* NOS (bsNOS). Radiolytically generated hydrated electrons (e_{aq}⁻) reduced the heme iron of NOS enzymes. Subsequently, ferrous heme reacted with O₂ to form a Fe²⁺-O₂ intermediate. In the presence of pterin, the Fe²⁺-O₂ intermediates of bsNOS was found to convert to other intermediates in the time range of milli-seconds. The intermediates of all of the NOS enzymes further converted to the original ferric form in the time range of seconds. Concurrently, RFQ EPR was used to trap a pterin radical during single-turnover enzyme reactions of DrNOS, bsNOS, and mNOS. The pterin radicals were formed very rapidly in both DrNOS and bsNOS in the time range of milli-seconds (~10³ s⁻¹). In contrast, the pterin radical in mNOS was observed to form slowly, at a rate of ~20 s⁻¹. These RFQ results were consistent with our pulse radiolysis experiments.

はじめに

哺乳類において一酸化窒素 (NO)は、血管弛緩、情報伝達、免疫機能にかかわる重要な生理活性物質として知られている。NO は一酸化窒素合成酵素(NOS) により、L-arginine (Arg) を酸化することにより合成される。NOS の大きな特徴はプテリンが NOS のヘム近傍に結合しており、電子供与体として働くことである。

一方、種々のバクテリアにおいても NOS が存在し、その機能は哺乳類における機能と全く異なる

ことが明らかにされた¹⁾。放射線に対して著しい耐性をもつ放射線耐性菌 (*Deinococcus radiodurans*) の NOS (DrNOS) は、放射線耐性に関与すると報告されている^{2,3)}。

我々はパルスラジオリシス法により DrNOS の反応機構を検討した。その結果、ミリ秒でのプテリンから酸素が結合した酵素へと電子が移動する過程が観測され、その後秒オーダーで基質酸化に伴い、元の酸化型に戻ることが分った⁴⁾。この結果は、従来 NOS において提唱されてきた基質の酸化過程において、反応中間体が基質を酸化する過程は速く、電子移動過程が律速となる機構とは明らかに異なる。この差が種の違いによるものか測定法の違いによるものか検討するために、

*K. Kobayashi, 06-6879-8502, kobayasi@sanken.osaka-u.ac.jp.

Rapid Freeze Quenching (RFQ) ESR 法により、還元型 NOS プテリン複合体と O₂ 飽和 buffer を混合して生成するプテリンラジカルを RFQ ESR 法により追跡した。本研究ではさらに mN についても DrNOS と同条件下でパルスラジオリシス法を行った。

実験

Bacillus subtilis ゲノムから PCR により NOS 遺伝子を単離、発現プラスミドを構築した。mNOS は京都府立大佐上郁子教授から提供を受けたラット神経型 NOS のクローンを発現プラスミドに構築した⁵⁾。NOS は *E. coli* (BL21) 中で大量発現し、ニッケルカラムおよびゲルろ過カラムにより精製した。

結果及び考察

Fig.1 に BsNOS のパルスラジオリシス後の 390 nm および 440nm の吸収変化を示す。いずれも e_{aq}⁻ によるヘム鉄の還元に基づく吸収の変化に引き続いて、100 μs の時間領域での吸収変化が観測された。この変化は、プテリンの添加により、

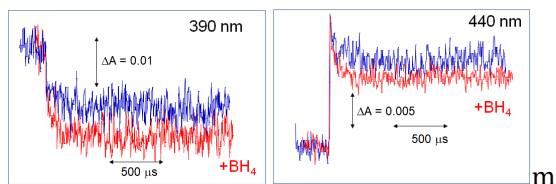


Fig. 1. Absorbance changes after pulse radiolysis of bsNOS in the presence (blue line) or absence (red line) of 50 μM H₄B monitored at 390 and 440 nm.

増加することが分かった。この変化はすでに報告した DrNOS プテリンからヘムの酸素化型への電子移動過程に対応する。このようにして生成した中間体は Fig. 2 に示すように秒領域で、元の三か型ヘムが生成することが分かった。

この結果バクテリア NOS に共通する性質であることが明らかになった。

RFQ 法により生成するプテリンラジカルの EPR の時間変化を追跡した。Fig.3 にその結果を示す。すでに報告されている mNOD では 200 ms でその

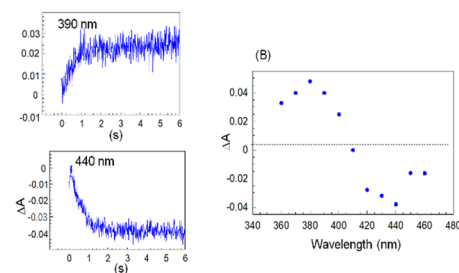


Fig. 2 (A) Absorbance changes after pulse radiolysis of bsNOS (B) Kinetic difference spectrum at 3 s after pulse radiolysis.

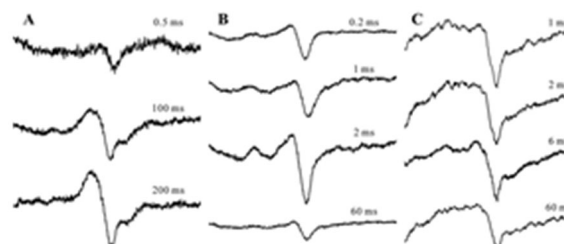


Fig. 3. EPR spectra of RFQ sample from the reactions of reduced mNOS heme domain (A), DrNOS (B) and bsNOS (C) with O₂-saturated buffer in the presence of Arg and H₄B (A, C) and H₄F (B).

ラジカル量が最大になるのに対して⁶⁾、バクテリアにおいては DrNOS および bsNOS においてはミリ秒においてプテリンラジカル生成が見られ、この結果はパルスラジオリシス法の結果と矛盾しない。

References

- 1) B. R. Crane, J. Sudhamsu, and B. A. Patel, *Annu. Rev. Biochem.* 2010, 79, 445.
- 2) Patela, B. A., Moreau, M., Widoma, J., Chen, H., and Yin, L., Huab, Y., and Crane, B. R. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA* 2009, 106, 18183.
- 3) Hansler, A., Chen, Q., Ma, Y., and Gross, S. S. *Arch. Biochem. Biophys.* 2016, 589, 38.
- 4) Y. Tsutsui, K. Kobayashi, F. Takeuchi, M. Tsubaki, and T. Kozawa, *Biochemistry* 2018, 57, 1611
- 5) I. Sagami, S. Daff, and T. Shimizu. *A. J. Biol. Chem.* 2001, 276, 30036.
- 6) A.R. Hurshman, C. Krebs, D. E. Edmondson, B. H. *Biochemistry* 1999, 38, 15689

直接イオン化による溶質ラジカルカチオンの発生と パルスラジオリシスを用いた直接観測

産研ナノファブ리케이션研究分野^a

神戸正雄^{a*}、菅晃一^a、楊金峰^a、田川精一^a、吉田陽一^a

Direct ionization-driven solute cation radical formation and its observation by means of pulse radiolysis

Dept. of Advanced Nanofabrication^a

Masao Gohdo^{a*}, Koichi Kan^a, Jinfeng Yang^a, Tagawa Seiichi^a, Yoichi Yoshida^a

Direct ionization-driven solute cation radical formation method was developed using considerably concentrated solution. The obtained solute radical cations were observed in the THF solution by means of pulse radiolysis. This technique enables diffusion-less cation formation which is needed for the observation of early stage processes to reveal cation reactions including self-decomposing reaction and reactions with the solvent molecules.

放射線誘起化学反応において、イオン化で生じる過剰電子だけでなく、イオン化を受けた親分子であるラジカルカチオンの反応も重要である。放射線誘起化学反応、特に溶液中の反応解析において有用なパルスラジオリシス法では、これまで主に溶媒からのホール移動を用いたラジカルカチオンの生成を利用してきた。主としてジクロロメタン等のハロゲン化溶媒を用いており、この手法はラジカルカチオン観測には優れた方法である。しかし、溶媒のラジカルカチオンから観測対象の溶質分子へのホール移動反応が律速となるため、時間分解能に制約を与えている。また、ラジカルカチオンの反応性を研究する、という観点からは、研究対象のラジカルカチオンを放射線により直接作り出す必要がある。そこで、溶質を超高濃度にするこゝで、パルス放射線の時間幅でラジカルカチオンを発生させ、直接イオン化によるラジカルカチオンの発生と観測を行った。このような電子ビームのパルス幅でラジカルカチオン生成時間を決めることができる手法は、フェムト秒パルスラジオリシス等の高時間分解計測の時間分解能を活かす上でも重要となる。

パルスラジオリシス測定は、阪大産研・量子ビーム科学研究施設にてLバンド電子線ライナックを用い、

電子線エネルギー26.5 MeV、パルス幅 8 ns、~65 Gy/pulse で行った。テトラヒドロフラン (THF) に 0.010~2.5 Mのビフェニル (Biph) を溶解させ、アルゴンバブリングにより脱酸素し、サンプル溶液とした。ここで、2.5 Mでは、Biph分子1つに対して溶媒であるTHF分子が3分子程度という濃度で、ほぼ飽和濃度 (~3 M) である。

ナノ秒パルスラジオリシスによる過渡吸収スペクトルは、10 mM等の低濃度ではBPラジカルアニオン (Biph⁻) のみの吸収が観測された。一方、1.0 Mや2.5 Mでは、Biph⁻に加え、Biphラジカルカチオン (Biph⁺) の吸収スペクトルが同時に観測された。また、同時に励起三重項 (³Biph^{*}) のT-T吸収も観測された。カチオン補足剤のトリエチルアミン添加により、Biph⁺の吸収が消失したと、既報によるBiph⁺の吸収スペクトルの特徴から、電子線の少苦節イオン化によるBiph⁺の生成が確かに観測されたと結論できる。¹

Reference

- 1) M. Gohdo, S. Tagawa, K. Kan, J. Yang, Y. Yoshida: *Radiat. Phys. Chem.* (2022) *in press.*

* M. Gohdo, 06-6879-4285, mgohdo@sanken.osaka-u.ac.jp

チオウラシルラジカルカチオン二量体の生成と構造 —パルスラジオリシス時間分解過渡吸収と過渡共鳴ラマン分光—

産研量子ビーム科学研究施設^a・産研励起材料化学研究分野^b

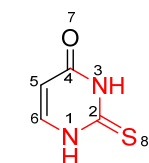
藤乗幸子^{a*}、小阪田泰子^b、誉田義英^a、藤塚 守^b

Formation and Structures of Thiourea Dimer Radical Cation by during Pulse Radiolysis
Research Laboratory for Quantum Beam Science^a, Dept. of Material Excitation Chemistry^b

Sachiko Tojo^{a*}, Osakada Yasuko, Yoshihide Honda^a, Mamoru Fujitsuka^b

We have developed the nanosecond time-resolved resonance Raman spectroscopy (ns-TR3) during pulse radiolysis. The oxidation of 2-Thiouracil (2-TU) with hydroxyl radical (OH•) in aqueous solution lead to the formation of intermolecular σ -dimer radical cation (2-TU₂^{•+}) with two-center three-electron bond between two sulfur atoms (2c-3e S··S). The ns-TR3 spectrum of 2-TU₂^{•+} shows peaks at 222, 295 (2c-3e S··S stretching), and 441 cm⁻¹ (C-S and ring stretching), while the C=S and C-N stretching vibrations at 463 and 715 cm⁻¹, respectively were not observed. This is the first report on the ns-TR3 direct measurement of 2c-3e S··S of dimer radical cation in thiouracil systems.

生体内抗酸化過程において硫黄化合物は重要な役割を担っている。含硫アミノ酸などの抗酸化機構を明らかにすることは生理学的酸化機構解明において重要である。本年度は、図1に示す2-チオウレア(2-TU)のヒドロキシルラジカル(•OH)による一電子酸化反応をパルスラジオリシス時間分解過渡吸収と過渡共鳴ラマン分光により検討した。



2-thiouracil
(2-TU)

Figure 1. Molecular structures of 2-Thiouracil used in this study.

2-TU水溶液のパルスラジオリシス過渡吸収スペクトルを図2に示す。

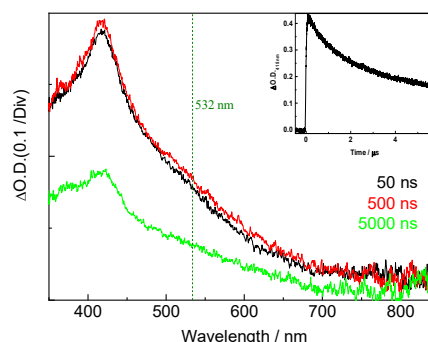
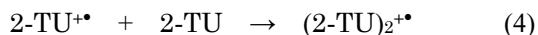
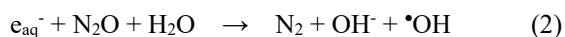
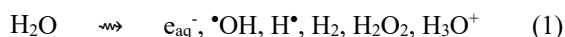


Figure 2. Transient absorption spectra obtained during pulse radiolysis of 2-TU (5 mM) in pH 7 MilliQ (N₂O atmosphere). Inset shows a time trace of the transient absorption at 415 nm.

•OHによる一電子酸化(式3)、二量化反応(式4)を経て415 nmに吸収を持つ分子間ダイマーラジカルカチオン2-TU₂^{•+}が生成する。

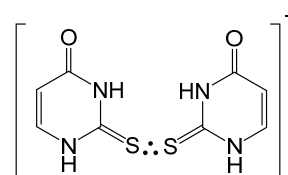


Figure 3. 2-TU₂^{•+} with two-center three electron S-S bond

* S. Tojo, 06-6879-8511, tojo@sanken.osaka-u.ac.jp

(2-TU)₂²⁺は二中心三電子 S-S(2c-3e S··S)結合を有するσ-型ダイマーラジカルカチオン(図 3)と報告されている。

(2-TU)₂²⁺の構造を時間分解ラマン分光により明らかにした。Nd-YAGレーザーからの532 nm光(パルス幅5 ns)を電子線照射から500 ns後に照射、ノッチフィルターによりレーリー散乱を除去、12 mのファイバーで分光器に誘導、冷却型CCD検出器で、(2-TU)₂²⁺の時間分解ラマンスペクトルを測定した。基底状態2-TUのラマンスペクトルとは大きく異なるラマンスペクトルが得られた(図4)。

2-TUでは463 cm⁻¹(N-C stretching)、715 cm⁻¹(C=S stretching)、1221 cm⁻¹(N-C stretching)、1628 cm⁻¹(C=C stretching)が観測された。一方、2-TU₂²⁺ではこれらの463, 715, 1221, 1628 cm⁻¹のシグナルは消失し、新たに220, 295, 441 cm⁻¹に過渡ラマンシグナルが観測された。すでに我々はKSCN水溶液のパルスラジオリシス過渡ラマン測定において、[•]OHによるSCN⁻の一電子酸化反応および二量化で生成する(SCN)₂^{•+}のS-S結合の伸縮振動を220 cm⁻¹に観測している。これより2-TU₂²⁺で観測された222, 295 cm⁻¹の過渡ラマンシグナルは、2-TU₂²⁺のσ-型ダイマーラジカルカチオン(図3)の2c-3e S··S結合伸縮振動と帰属された。計算結果とも一致した。

2-TUおよび(2-TU)₂²⁺の最適化構造とスピン密度を図5に示す。2-TUとのC-S結合距離は1.666から1.724 Åと増加、C-N結合距離は1.369から1.350 Åと減少し二量化によるS··S結合生成が示された。また2-TU₂²⁺のスピン密度は2つのS上に局在化していることも示された。昨年報告したDMTU₂²⁺の結果とも良い一致を示した(表1)。

今後タンパク質中における含硫黄アミノ酸の酸化過程で生成される2c-3e S··S、2c-3e N··S、2c-3e O··S結合を有するσ-型ダイマーラジカルカチオンについて、各過渡ラマン分光により構造情報と速度論的知見を得ていく予定である。

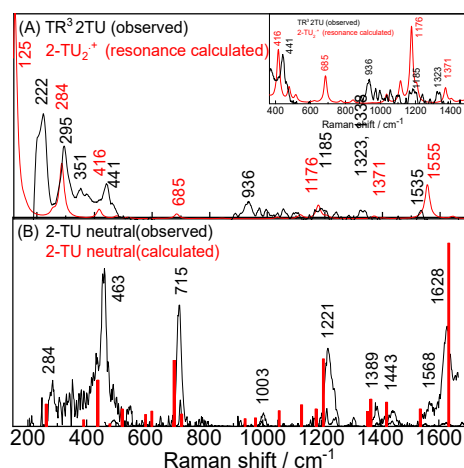


Figure 4. (A) ns-TR³ spectrum observed at 500 ns after an 8-ns electron pulse during the pulse radiolysis of 2-TU (5 mM) in N₂O-saturated aqueous solution. Probe: 532 nm (black). Red line shows the Raman spectrum of 2-TU₂²⁺ calculated by TDDFT at UB97B/6-31G(d) level. (B) Raman spectrum of neutral 2-TU in aqueous solution. Probe: 355 nm (black). Vertical red lines show the Raman peaks of 2TU calculated by B3LYP/6-31G(d).

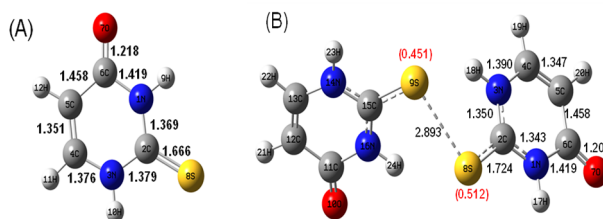


Figure 5. Optimized structures of (A) 2-TU and (B) 2-TU₂²⁺ obtained by using DFT calculations at B3LYP/6-31G(d) level. Numbers in black are calculated bond lengths (Å). The yellow, red, and blue colors show S, O and N atoms, respectively. Spin densities of the two sulfide atoms of 2-TU₂²⁺ are given in red parentheses.

Table 1 λ_{max}, S··S and C-S Raman shifts, S··S distance, changes in C-S bond length and Mulliken Spin Densities for 2-TU₂²⁺ and DMTU₂²⁺.

Dimer radical cation	λ _{max} (nm)	ν _{S-S} (cm ⁻¹)	ν _{C-S} (cm ⁻¹)	S··S distance (Å)	ΔC-S bond length (Å)	spin density on S atom
2-TU ₂ ²⁺	415	210, 295	441	2.893	+0.058	0.451 0.512
DMTU ₂ ²⁺	415	210	467	2.879	+0.048	0.444 0.444

微細加工用レジストポリマーのパルスラジオリシス

産研量子ビーム物質科学分野

岡本一将^{*}、古澤孝弘

Pulse radiolysis of resist polymer for nano/microlithography

Dept. of beam materials science, SANKEN

Kazumasa Okamoto^{*}, Takahiro Kozawa

The demand for improved performance of resist materials is continually increasing with the development of EUV lithography. However, the detailed mechanism of acid generation mechanism in molecular level has not been clarified yet. Formation of the radical cations of polymer and deprotonation from the radical cations is an important reaction in order to evaluate acid generation. In this study, we investigated the dynamics of the radical cations of polymers as resist models by using the pulse radiolysis method.

現在、メモリやプロセッサなど半導体製品の製造において、リソグラフィ技術が微細加工に用いられ、その発展により集積化が進められている。また近年、極端紫外線(EUV)を光源とする EUV リソグラフィの導入が開始され、基板にパターンを転写するための微細加工材料であるレジストにおいて、主に EUV 光子(92.5 eV)による光電効果により誘起される放射線化学反応の重要性が高まりつつある。

一方で、半導体集積度を上げるために 10 nm 以下のレジストの解像度や 1 nm 以下の解像誤差(LER)が求められていることから、分子レベルでのレジストポリマーのダイナミクスの解明を行う必要がある。EUV 用化学増幅型レジスト用ポリマーとしては、従来の KrF, ArF リソグラフィで用いられてきた経緯からポリスチレン系およびポリメタクリレート系が想定される。本研究では、レジストのモデルの一つであるポリスチレン-アクリレート(PS-MMA)系共重合体に着目し、イオン化で生成するラジカルカチオンのダイナミクスについてパルスラジオリシス法によって調べた。

以前の研究より、ポリスチレンは、200 mM/unit 程度の濃度の塩素系溶媒中で、ポリスチレン分子にラジカルカチオンが生じ、分子内ダイマーラジ

カルカチオンに起因する電荷共鳴バンド(Charge Resonance (CR) band)を近赤外波長域に特徴的な吸収を示すことが知られているが、PS-MMA 共重合体中における正電荷の非局在性の程度についてその詳細は明らかにされていない。また、これを明らかにすることで、化学増幅型レジストの重要な機構であるポリマーのラジカルカチオン生成および脱プロトン反応に関する詳細なメカニズムの解明に結び付けることができる。

パルスラジオリシス実験は、阪大産研 L-バンドライナックを照射源とするナノ秒パルスラジオリシス装置を使用した。サンプルには Ar 飽和させたポリスチレンおよび PS-MMA の 1,2-ジク

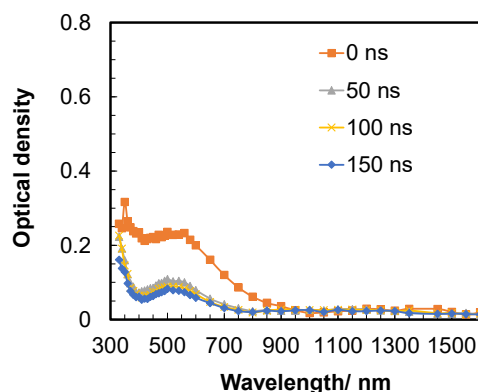


図1. ナノ秒パルスラジオリシスで得られた PS-MMA(交互共重合体)/1,2-ジクロロエタン溶液(50 mM/unit)のパルスラジオリシスの過渡吸収スペクトル(8 ns 電子線照射後 0~150 ns 後).

^{*}K. Okamoto, 06-6879-8502, kazu@sanken.osaka-u.ac.jp

ロロエタン溶液を用いた。今年度は従来行っていなかった PS-MMA の交互共重合体溶液の測定を実施した。図 1 に得られた結果を示す。ランダム共重合体ではスチレンと MMA の 1 : 1 モル比の共重合体が近赤外領域にダイマーラジカルカチオンに起因する CR バンドを示すのとは異なり、CR band の吸収ピークは観察されず、MMA ユニットがポリマー鎖中の正電荷の非局在性に対し、スペーサ機能を果たすことが明らかとなった。ダイマーラジカルカチオンの生成はその安定性の獲得からラジカルカチオンからの脱プロトン反応がより起きにくくなると考えられるため、交互共重合体は化学増幅型レジストポリマーとしてより高い酸収率が期待される。

Reference

- 1) K. Okamoto et al., Radiat. Phys. Chem. 60 (2001) 417.

電子線照射による物質制御

産研量子ビーム発生科学研究分野

入澤明典

Material control by electron beam irradiation

Dept. of Accelerator Science

A. Irizawa

The purpose of this study is to research the irreversible changes of physical properties in solids due to electron beam irradiation. In general, the solid-state electronic state changes due to the introduction of defects by electron beam irradiation, but in this study, we will verify whether the effect differs depending on the electron beam of various pulse widths of this facility. The high-speed short-pulse electron beam is considered to affect materials as a short-term electric field change when passing through them. It is interesting to compare the effect of FEL irradiation which is also a high-speed electric field change. Semiconductor samples are irradiated with an electron beam having a pulse width of nanoseconds to picoseconds with the same dose, and the change in the electronic state is observed.

半導体への電子線照射は格子欠陥によるキャリアドープを生み、その電子状態を変化させ制御できることがよく知られている。実用的に用いられる手法のため、詳細な条件などは必ずしも明らかではない場合が多く、無数の研究結果から比較対象を抽出することは困難である。本研究では量子ビーム施設のLバンドライナックから得られる異なるパルス幅の電子線を制御し、高速で物質中を通過するパルス電子による電場の高速振動に着目してその効果を検討することを目的とする。LバンドではnCに及ぶ大電荷が発生でき、ピコ秒からナノ秒までの幅広い高速パルス電子線を物質に照射することが可能である。また、同じくLバンドライナックを用いて発生することのできるTHz・遠赤外自由電子レーザー (THz FEL) を用いた物質への照射実験もこれまで様々な形で展開してきており、高速電場振動の物質へ及ぼす影響という観点でも比較対象として興味深い。本研究では半導体を対象とし、第1回の照射実験を行った。後期の新規課題申請であったため残念ながら1回のみの実験であり、学外からの単独申請は不可能であるとのことで今後の展開は不透明であるが、施設利用方法が改変され学外からのビーム施設利用が可能となった暁には引き続き研究を進めたい。行った照射の効果については現在検討中である。

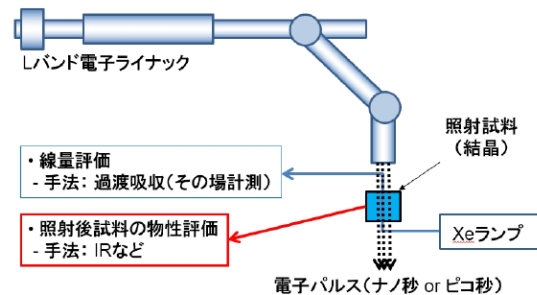


図1. 高速パルス電子照射実験の模式図

Reference

1. T. Kawasaki, A. Irizawa et al., Sci. Rep. **9(1)**, 1-8 (2019).
2. A. Irizawa et al., Condens. Matter **5(1)**, 38-1-14 (2020).
3. S. Macis, A. Irizawa et al., Condens. Matter **5(1)**, 16-1-10 (2020).

Lバンド電子ライナックによる THz-FEL を用いた固体励起状態の研究

産研量子ビーム発生科学研究分野

入澤明典*, 菅滋正、東谷篤志、藤原秀紀、August Marcelli, Stefano Lupi

Study of Excited States of Solids Using THz-FEL with L-Band Electron Linac

Dept. of Accelerator Science

A. Irizawa*, S. Shigemasa, A. Higashiya, H. Fujiwara, A. Marcelli, S. Lupi

Far-infrared-terahertz spectroscopy can directly observe bulk-electronic states of materials rather than photoelectron spectroscopy, and is an important spectroscopy technique to reflect near the Fermi level of solids. In particular, high-intensity THz-FEL is attracting attention worldwide because they can be used not only as probe-light source but also as pump-light source for electronic excitation of a solid. In this research, high-precision, high-resolution observation in the terahertz region is performed on solid excitation phenomena including nonlinear region using a circular polarization system installed downstream of the FEL beam line and a measurement optical system including an imaging scan system. We aim to pioneer in the world a new field with a view to physical property control and practical application that has not been possible in the past, making the best use of the high strength THz-FEL characteristics.

量子ビーム発生科学研究分野は産業科学研究所 附属・量子ビーム科学研究施設においてLバンド電子ライナックを用いたTHz・遠赤外自由電子レーザー (THz FEL) の開発および利用研究の開拓を行ってき、様々な研究分野に対して内部および外部ユーザー利用の展開を試みてきた。高強度、短パルス、単色性を合わせ持ったTHz FEL に対する利用方法は大きく分けてエネルギーもしくは波長分散測定(分光測定)、時間応答測定、および空間分散観測(イメージング)など、プローブ光としての利用と、高強度性、コヒーレント性、単色性、偏光性を生かし、テラヘルツ波の特性を生かしたポンプ光としての利用があげられるが、本研究ではこれらを組み合わせた様々な利用実験を世界に先駆けて模索してきた。波長選択性に関しては任意の波長中心で準単色光を取り出すことが可能となった。この波長選択性を利用して、高強度性を最大限に生かすことで特定のエネルギー状態を選択的に励起することが可能となった。本研究は、テラヘルツ・遠赤外領域で初めて観測されたLIPSS (Laser Induced Periodic Surface Structure)[1] に関して、その形成機構と物性解明のために必要な試料の作成を行った。図1に示すように試料面積の必要な実験用にラスタースキャン法による大面積のLIPSS試料を作成した。今後、物質量の必要な分光

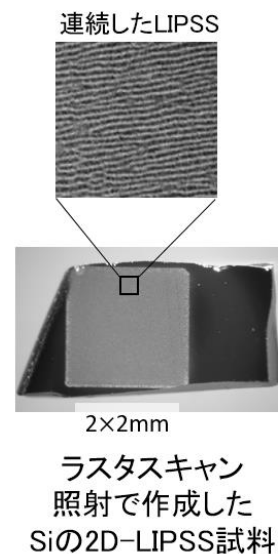


図1. Si ウエハに作成した 2D-LIPSS

計測やマクロな物性測定などに用いる予定である。直近では放射光を用いたXAFS測定、ESCAによる2次元マッピングである。外部からのFEL利用は現状不可能であるため今後の実験予定は未定であるが、制度変更が行われれば継続して利用する予定である。

Reference

1. Irizawa et al., Appl. Phys. Lett. **111**, 251602 (2017)

自由電子レーザーを用いた化学結合状態の2次元評価技術に関する研究

産研量子ビーム発生科学研究分野

入澤明典*、西原克浩

Research on 2D spectral evaluation technique of chemical bonding state using free electron laser

Dept. of Accelerator Science

A. Irizawa*, K. Nishihara

The purpose of this research is to establish an evaluation technology for nondestructive analysis of the change in the state and the distribution of chemical bonding in the vicinity of the interface between an organic material and a metal as the corrosion progresses, targeting metals coated with organic materials such as resins or metals embedded in ceramic materials such as concrete. In this study, we will investigate the qualitative / quantitative analysis ability (by transmission method) for metal compounds with different chemical bonding states using a FIR / THz free electron laser with high transmission ability to organic materials and ceramic materials. Additionally, the two-dimensional analysis capability (by reflection method) is also investigated for a model material in which a metal compound is supported on metal and the surface is coated with a resin tape.

量子ビーム発生科学研究分野は産業科学研究所附属・量子ビーム科学研究施設においてLバンド電子ライナックを用いたTHz・遠赤外自由電子レーザー (THz FEL) の開発および利用研究の開拓を行っており、様々な研究分野に対して内部および外部ユーザー利用の展開を試みてきた。高強度、短パルス、単色性を合わせ持ったTHz FELに対する利用方法は大きく分けてエネルギーもしくは波長分散測定 (分光測定)、時間応答測定、および空間分散観測 (イメージング) など、プローブ光としての利用と、高強度性、コヒーレント性、単色性を生かし、テラヘルツ波の特性を生かしたポンプ光としての利用があげられるが、本研究ではレーザー特有の高強度性と集光特性を活かしたテラヘルツ領域の2D分光イメージングおよび顕微分光についておこなった。本研究は、樹脂等有機材料によって被覆された金属やコンクリート等セラミックス材料に埋設された金属を対象として、腐食進行に伴う有機材料/金属界面、あるいはセラミックス材料/金属界面近傍における化学結合状態およびその分布の変化を非破壊分析する評価技術を確立することが目的であった。有機材料やセラミックス材料に対する透過能力が高い (遠赤外/THz) 自由電子レーザーを用いて、化学結合状態の異なる金属化合物に対する定性/定量分析能力 (透

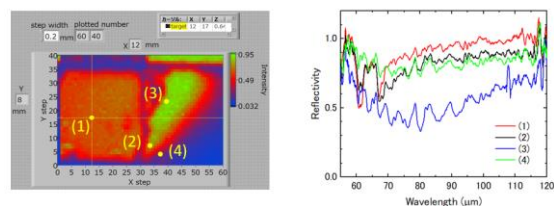


図1. 高分解能分光イメージングおよび任意位置での顕微分光測定結果

過法)を調査すると共に、金属上に金属化合物を担持して、表面を樹脂テープで被覆したモデル材料に対して、2次元分析能力 (反射法)を調査した。図1に高速2D分光イメージングおよび任意位置での顕微分光例を挙げる。実用的な高い分析力が利用可能となった[1, 2]。今後は立命館大学SRセンターに拠点を移し、放射光を用いた赤外分光に加えてXAFSやESCAなどX線も積極的に用いた多角的な研究展開を行う予定である。産研量子ビーム施設でも今後外部からの利用が可能となった場合は必要に応じて研究を展開できればと考えている。

Reference

1. A. Irizawa et al., *Condensed Matter* **5**, 38 (2020)

2. 西原 克浩 「量子ビームを用いた分光学的手法による腐食解析技術の開発」 日本鉄鋼協会 学術記念賞／白石記念賞 2022年

過渡赤外法を用いた酸化チタンのキャリアダイナミクスの観察に向けた装置の構築

産研励起材料化学研究分野^a、高等共創研究院^b、産研量子ビーム科学研究施設^c

小阪田泰子^{a,b}、藤乗幸子^c、藤塚守^{a*}

Transient infrared spectroscopy for observing carrier dynamics of titanium dioxide

Dept. of materials excitation chemistry^a, IACS^b,
Research Laboratory for Quantum Beam Science, SANKEN^c

Yasuko Osakada^{a,b}, Sachiko Tojo^c, Mamoru Fujitsuka^{a*}

We employed the transient infrared spectroscopy to characterize the carrier dynamics in titanium dioxide.

近年、酸化チタンに代表される半導体材料を用いた光触媒は、外壁のコーティング剤や抗菌・抗ウイルス剤として広く用いられている。半導体材料の光触媒に光照射を行うことで電子や正孔（光キャリア）が形成され、光触媒界面での酸化還元反応などが引き起こされるが、今後の反応効率の向上に向けては、より詳細な素過程の反応追跡が重要となる。これまでに過渡吸収測定法を用いた反応追跡が数多くなされてきたが、光触媒系での振動分光を用いた光キャリア追跡については検討例があまりない。例えば、将来的に、パルスラジオリシス法と組み合わせた酸化チタンなどの半導体材料の光キャリアダイナミクスについて調べることができれば、過渡吸収法との補完的な分光手法となり、光キャリアの反応過程の本質理解につながる可能性がある。そこで、本年度は、光触媒材料での、レーザー励起でのナノ秒時間分解過渡赤外分光装置の構築を試みた。¹

実験内容

過渡赤外スペクトルを測定するために用いた装置を、図1aに示した。サンプルには、代表的な酸化チタンであるP25を用い、CaF₂板2枚で1 mg程度を挟むことで、サンプルホルダに設置した。Nd-YAGレーザーからの355 nmレーザー光（パルス幅 5 ns）を照射し、赤外光源からの赤外光をプローブ光として用い、透過型で測定を行った。その結果、1700 cm⁻¹での過渡吸収の減衰が見られ、バンドギャップ励起により形成さ

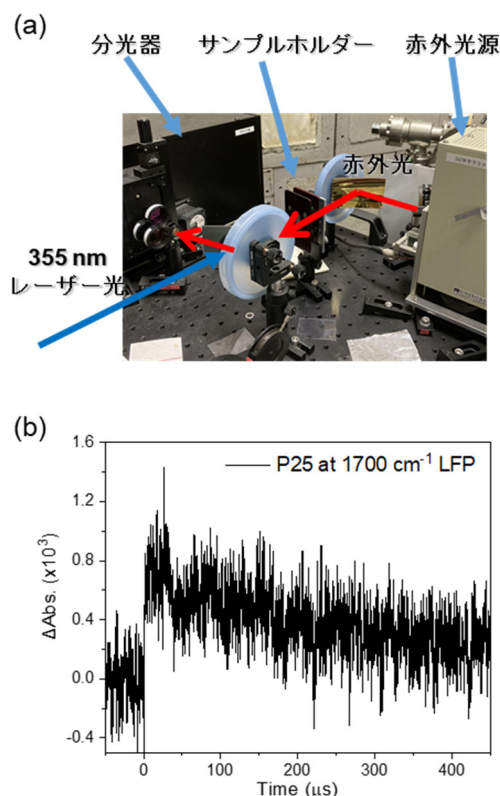


図 1. (a) 装置の外観写真と (b) 1700 cm⁻¹ での過渡吸収の時間変化。

れた光キャリアの再結合に帰属した (図1b)。² 今後は、さまざまな半導体材料での過渡赤外分光や、パルスラジオリシスと組み合わせた反応過程の解析などに展開する。

References

- 1) Y. Paz *et al.* *J. Phys.: Condens. Matter.* **2019**, 31, 5030.
- 2) Yamakata *et al.* *Appl. Phys. Lett.* **2021**, 119, 133905.

フォトカソード RF 電子銃加速器における超短パルス電子ビーム発生と THz 計測

産研極限ナノファブリケーション研究分野(吉田研)

菅晃一*, 神戸正雄, 楊金峰, 吉田陽一

Generation of ultrashort electron beam using photocathode RF gun linac and THz measurement

Dept. of Advanced Nanofabrication, ISIR, Osaka Univ.

K. Kan*, M. Gohdo, J. Yang, and Y. Yoshida

Ultra-short electron bunches with pulse durations of femtoseconds are applied to many scientific applications such as free-electron lasers, terahertz light sources, and pulse radiolysis. In this paper, measurements of two undulators for short bunch generation using laser modulation are reported.

1. はじめに

フェムト秒のパルス幅を有する超短パルス電子ビームは、自由電子レーザーやレーザーコンプトンX線源、テラヘルツ光源など加速器物理において利用されている。一方で、超短パルス電子ビームは、パルスラジオリシス[1]や時間分解電子顕微鏡など放射線化学・物理化学分野の時間分解計測の研究にも応用されており、フェムト秒・ピコ秒の時間領域で誘起される超高速現象を観測するための重要なツールとなっている。

フェムト秒・ピコ秒電子ビームパルスは、1 psの逆数が1 THzに相当するため、テラヘルツ領域の電磁波研究にも利用されている。同時に、より短いパルス幅を持つ電子ビームは、電子ビームの分布をフーリエ変換することにより得られるバンチ形状因子から、より広帯域の電磁波を高強度で生成することがコヒーレント放射として知られている。電子ビームを用いたテラヘルツ波の発生は、自由電子レーザー、コヒーレント遷移放射、コヒーレントチェレンコフ放射、スミス・パーセル放射等により行われている。いずれの放射においても、コヒーレントな効果を利用した場合、得られるテラヘルツ波の周波数特性はバンチ形状因子に支配される。そのため、テラヘルツ放射が電子ビームパルス幅の診断および光源として利用されることがある。

本報告では、電子ビーム源として、フォトカソードRF電子銃加速器を用いた。電子ビーム発生には、Nd:YLFピコ秒レーザーからの紫外光パルス(パワー <1.4 mW、繰返し 10 Hz、波長 262 nm)もしくはフェムト秒レーザーからの紫外光パルス(パワー <80

mW、繰返し 1 kHz、波長 266 nm)を想定している。2021年度に、ピコ秒レーザーの発振器部および増幅部の修復を行い、ピコ秒レーザーによる電子ビーム発生は利用可能な状況にある。

フォトカソードRF電子銃にいずれかのレーザー(紫外光パルス)を入射し、光電子による電子ビームを発生している。レーザーと電子銃の間に反射型の変換ND(neutral density)フィルターを設置し、カソードに照射するレーザーのパルスあたりのエネルギー、つまり発生電荷量を調整した。また、加速器は、フォトカソードRF電子銃、加速管、磁気パルス圧縮器により構成される。パルス圧縮されたフェムト秒電子ビーム(エネルギー 35 MeV、繰返し 10 Hz、電荷量 <1 nC/pulse)を発生した。電子ビームエネルギー変調によりパルス圧縮を行うために、加速管における加速位相は100°前後に設定した。発生したフェムト秒電子ビームを、高真空系のビームラインを隔てるチタン箔のビーム窓から低真空系の測定用真空チャンバーに取り出し、利用している。電子ビーム診断では電子ビーム由来のテラヘルツ波の測定を行っている。

今年度は、レーザー変調による電子ビーム圧縮のための二台のアンジュレータの磁場測定を行ったので、その結果について報告する。

*K. Kan, 06-6879-4285, koichi81@sanken.osaka-u.ac.jp

2. アンジュレータの磁場測定

レーザー変調の効果の最適化を行う場合は、光源として使用した場合のアンジュレータの発振波長と使用するレーザーの波長を一致させる必要がある。電子ビームエネルギー32.5 MeV ($\gamma \approx 64.6$)において、既存のレーザー波長800 nmを考慮し、アンジュレータの基本波の共鳴波長で800 nmを満たすような周期長を検討した。その結果、磁場周期長を6.6 mmとし、K値/磁場振幅が、0.15/0.25 Tであれば共鳴条件を満たすことが分かった。

2つのアンジュレータを準備し、磁場 B_y の測定を行った。図1は測定系を示す。ホール素子 (THS106A) をアンジュレータ中で掃引し、ステージのパルス移動完了トリガでホール素子の出力電圧をDAQ(Data Acquisition)により測定した。

図2にアンジュレータの端の数周期の磁場分布測定結果を示す。図2 (a)は製品(product)の測定結果であり設計通り0.25 Tの磁場を達成していることが分かった。Figure 2(b)は試作品(prototype)の測定結果であり、ギャップ長 g を調整して変化する磁場分布を示し、0.2~0.4 Tまで調整可能であることが分かった。今後、磁場分布の解析を行い、アンジュレータの改良の検討を行う。一方、Elegant計算コードを用いて、レーザー変調の程度(バンチング因子等)の電子ビームエネルギー(中心値、幅)依存性の調査も行う。最終的にレーザー変調実験へ展開する。

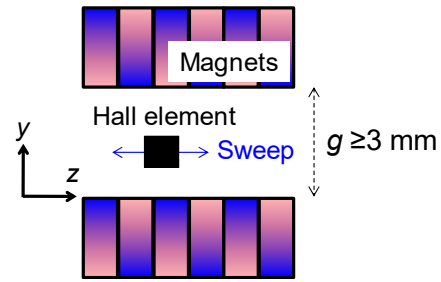


図1 測定系

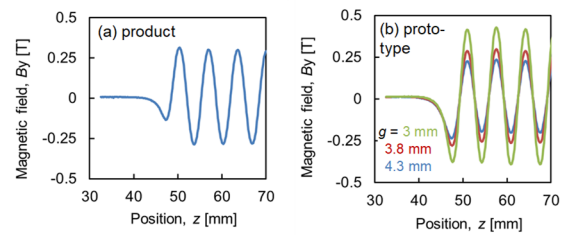


図2 測定結果

Reference

- [1] J. Yang et al., Nucl. Instrum. Meth. A 637, S24 (2011).

加速器を用いた材料改質と新規機能性材料創製に関する研究

産研ナノ極限ファブ리케이션研究分野^a、阪大院工ダイキン協働研究所^b

菅晃一^a、大島明博^{ab}、吉田陽一^{a**}、佐藤数行^b、足達健二^b

Material modification using low energy electron beam

Dept. of Advanced Nanofabrication^a, Daikin Industries Joint Research Laboratory^b,

Koichi Kan^{a*}, Akihiro Oshima^{ab}, Yoichi Yoshida^{a**}, Kazuyuki Sato^b, Kenji Adachi^b

For modification of various polymer materials, high dose radiation by using a low energy electron beam accelerator was used for the grafting of the fluorine-based groups at ISIR, Osaka University. Samples was prepared and then irradiated by electron beam, and then some properties evaluated in the laboratory.

産業界において電子線(EB)照射による各種高分子の改質や機能性付与、キュアリング等が幅広く行われている。高分子にEB等の放射線を照射すると、ラジカルが誘起され、このラジカルが、近傍の高分子鎖ラジカルと化学反応することで架橋/分解反応が起きる。架橋により高耐熱化・高強度化等の改質ができる。また、誘起されたラジカルの寿命内にモノマーなどと反応させることにより、高分子に接ぎ木「グラフト」することにより有用な機能性を付加できる。

本研究では、岩崎電気製の低エネルギー電子加速器(EC250/15/180L定格：250kV, 10mA)からのEBを用いて、各種高分子にEB照射を行い、フッ素系/非フッ素系モノマー等をグラフト反応(前照射法)させることによる親水あるいは撥水性等の機能付与の検討を行い、機能性材料の研究開発を行った。

本年は、フッ素系フィルムの成形性を改善することを目的として、フッ素系フィルムに対してフッ素系モノマーのグラフトを検討した。フッ素系高分子は、解離的電子付加反応を経由して高分子鎖にラジカルを形成するが、パーフルオロ系では、β切断により分解反応が優先する。このため、低線量でのEB照射により基材の分解が少ない状態でグラフト反応を検討した。

EB装置のスペックから、下限の吸収線量を測定した結果は、電圧250kV、電流値1mAで、搬送速度20m/minで、8.33kGy/passであった。この条件で、フィルムに照射を行い、フッ素系モノマーを60℃で最大48時間反応させた。得られたサンプルを3M社製のNovoc7200により洗浄し、乾燥させたのち反応前後の重量変化からグラフト率を算出した結果、反応時間に対して3~5%で飽和することがわかった。グラフトにより、降伏点強度やヤング弾性率は向上しているものの破断強度が低下した。以上の結果から、8.33kGyの低線量でも基材の分解が一部起きている可能性があることがわかった。

最後に、本EB照射装置は、四国経済産業局から大阪大学産業科学研究所への無償貸付物品であり、高分子へのEB照射によるグラフト重合や改質などのために使用している。この場で謝辞を申し上げます。



Fig.1 Functionalization of polymer materials by low energy and high dose electron beam

コバルトからの γ 線を用いた新規機能性材料創製に関する研究

産研ナノ極限ファブリケーション研究分野^a、阪大工学研究科ダイキン協働研究所^b

菅晃一^a、大島明博^{ab}、吉田陽一^{a**}、佐藤数行^b、足達健二^b

Development of functional materials using γ -rays irradiation

Dept. of Advanced Nanofabrication^a, Daikin Industries Joint Research Laboratory^b,

Koichi Kan^{a*}, Akihiro Oshima^{ab}, Yoichi Yoshida^{a**}, Kazuyuki Sato^b, Kenji Adachi^b

A radiation-induced graft-polymerization was studied for the purpose of improving the formability of the fluorine-based film. The G value of radicals of the fluoro-resin used for this experiment was about 0.9 - 1.0 from the ESR measurement. As a result of performing a graft reaction using various fluorine-based monomers (C6SFA, C6SFMA, C6olefin, H2penten, 6FD), it was found that although the graft reaction proceeds in each case, the ease of grafting differs depending on the type of monomer.

放射線による産業利用において、各種高分子の改質や機能性付与、キュアリング等が幅広く行われている。本研究ではフッ素系フィルムの成形性を改善することを目的として、グラフトの検討を行った。2種類のフッ素系樹脂のペレット試料に対してフッ素系モノマーのグラフトを検討するため、それぞれの試料について、グラフト反応の開始点となるラジカル挙動をESRにより評価した。

フッ素系樹脂ペレットを酸素フリーに調整したガラスサンプルに封緘し γ 線を用いて照射を行った。照射後、熱処理によるラジカルの失活挙動をESRにより室温で観察した。また、照射後、フッ素系モノマーをグラフト重合した。

2種類の試料ともラジカル収量は、線量とともに線形的に増加し、50kGy程度から飽和が始まった。線形領域の傾きを使ってラジカルのG値を算出した結果、0.9~1.0程度であった。

Fig.1に各温度で熱処理を30分行った時のラジカル失活挙動を示す。熱処理によりどちらの試料も80°C以上でラジカルは失活が大きく進行した。各温度でのラジカルの経時変化を調べた結果、80°Cでは、1時間の熱処理で初期の収量の4割以下になったことから、グラフト反応は、80°C未満で行う方がよいと考えられる。

ラジカル挙動の結果をもとに60°Cでグラフト実験を行った。各種フッ素系モノマー(C6SFA, C6SFMA, C6olefin, H2penten, 6FD)を用いてグラフト反応を行った結果、いずれもグラフト反応は進行するもののモノマーの種類によってグラフトのしやすさが異なることがわかった。

最後に、 γ 線照射実験にあたり、施設の福井様、古川様はご協力いただきました。感謝申し上げます。

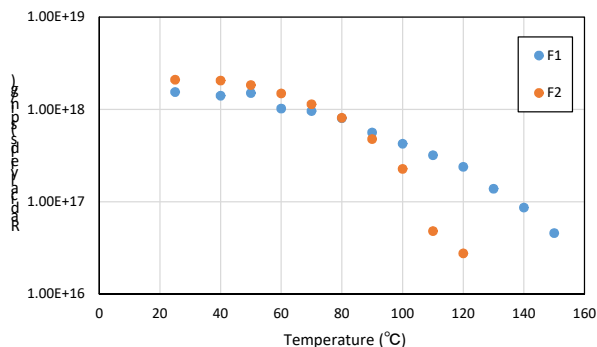


Fig.1 各温度で熱処理を 30min 行った時のラジカル失活挙動：室温・酸素フリー照射，49.5kGy，大気暴露後，室温観測

パルスラジオリシス法を用いたイリジウム錯体のシンチレーション過程の観察

産研励起材料化学研究分野^a、高等共創研究院^b、産研量子ビーム科学研究施設^c

小阪田泰子^{a,b*}、Zuoyue Liu^a、藤乗幸子^c、川井清彦^a、藤塚守^{a*}

Observation of scintillation process on iridium complexes during pulse radiolysis

Dept. of materials excitation chemistry^a, IACS^b,
Research Laboratory for Quantum Beam Science, SANKEN^c

Yasuko Osakada^{a,b*}, Zuoyue Liu^a, Sachiko Tojo^c, Kiyohiko Kawai^a, Mamoru Fujitsuka^{a*}

Pulse radiolysis were carried out to investigate the photochemical properties on iridium complexes.

近年、イリジウム錯体は、有機ELや可視光レドックス触媒に用いられるなど、りん光材料としての励起三重項からの発光を利用した応用がなされている。¹一方、以前に、我々は、このイリジウム錯体を含有したナノ粒子で、X線発生装置のX線管印可電圧50 keVで発生した白色硬X線励起による可視光発光を報告している。²今後の硬X線励起発光を用いたイメージングや生体機能操作への利用の可能性が示唆されたものの、治療にも用いられているLINACでの電子線照射条件下でのイリジウム錯体のシンチレーション過程については、いまだ検討されていなかった。今回、ナノ秒パルスラジオリシス法を用い、イリジウム錯体の電子線励起による発光および励起三重項状態を観察し、その溶液中でのシンチレーション過程の特性を調べた。

実験内容

パルスラジオリシス法での測定では、Ir(dfppy)₃のトルエン溶液 ($Abs_{355} = 1.5$)を調整し (図1a)、Ar雰囲気下、量子ビーム科学実験施設のLINACより、電子線パルス (28 MeV、8 ns)を照射し、過渡吸収を測定した。図1bにナノ秒領域での時間分解過渡吸収スペクトルを示した。500 nm付近の発光と450 nm付近の吸収の減衰が見られ、それぞれの減衰の時定数は0.7 μ sと一致し、さらに酸素による消光が見られた。これらは、電子線励起による励起三重項形成を経たシンチレーション過程が見られたことを示している。今

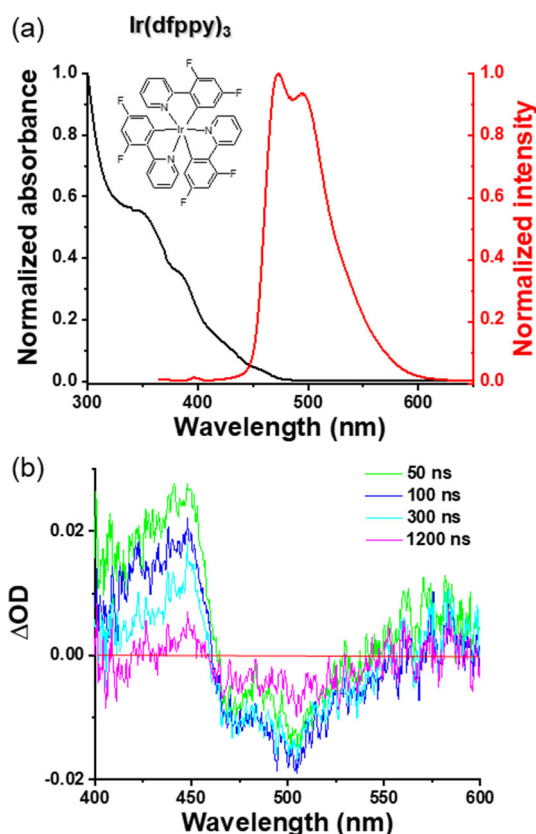


図 1. (a) 用いたイリジウム錯体 Ir(dfppy)₃ の吸収・発光スペクトル (励起波長 355 nm) (挿入図) Ir(dfppy)₃ の化学構造。(b) LINAC での電子線照射後の過渡吸収スペクトル。

後、配位子の異なるイリジウム錯体での検討を行い、シンチレーション過程の一般性を調べる。

References

- 1) N. Armaroli *et al.* *Acc. Chem. Res.* **2021**, *54*, 1492.
- 2) Y. Osakada *et al.* *Chem. Commun.* **2013**, 49 4319.

Sバンドライナックを用いた陽電子ビームの生成・利用

産研量子ビーム科学研究施設

誉田義英^{*}、藤乗幸子

Generation and application of slow positron beam based on the S-band linac

Research Laboratory on Quantum Beam Science, ISIR

Yoshihide Honda^{*}, Sachiko Tojo

Generated slow positron beam using the S-band linac is transported about 30 m with the aid of magnetic field. To apply the positron beam for the measurement of positron annihilation spectroscopy, the energy of the positron beam should be reduced to around 10 eV to be stored in the straight beamline before pulsing. In this year, the re-emitted positrons from the re-moderator were transported to the downstream beamline.

1. はじめに

低速陽電子ビームの利用方法の1つに陽電子寿命測定があるが、この測定を行うためには高繰り返しの短パルス陽電子ビームが必要である。150MeV Sバンド電子ライナックで生成される陽電子ビームのパルス幅、繰り返しは基本的に電子ライナックの電子ビームと同じであり、パルス幅も長く、繰り返しも少ないためこの目的では使用できない。このためソレノイドコイル磁場でガイドされた陽電子ビームを一度直線部で蓄積し、高繰り返しで再度パルス化する必要がある。陽電子発生部から輸送されてくる陽電子のエネルギーは800eV程度であり、蓄積するためには陽電子ビームの輸送エネルギーを10 eV程度まで下げる必要があり、これには陽電子の再放出現象を利用する。昨年度は輸送された陽電子ビームをリモデレータまで輸送することができた。今年度はリモデレータからの再放出陽電子ビームの確認、及びその後の陽電子ビームの蓄積、パルス化を目標とした。

2. 再放出陽電子ビームの輸送

陽電子再放出部を図1に示す。陽電子は磁力線に沿って輸送されるため、磁力線はリモデレータの上流側からも下流からもリモ

デレータに向かうようにリモデレータ前にソレノイドコイルを設置している。このままではリモデレータから再放出した陽電子は再び上流側に輸送されてしまうため、リモデレータ前に平行平板による電場を作り、 $E \times B$ ドリフトにより、リモデレータから再放出された陽電子ビームが磁力線を乗り越えて下流側に進むようにしてある。上流側の磁力線と下流側の磁力線が合流する部分では、磁力線が歪み磁力線に沿って輸送される陽電子ビーム径も著しく変形し、上下に引き伸ばされる。またこの部分では曲率ドリフトにより紙面に垂直方向にドリ

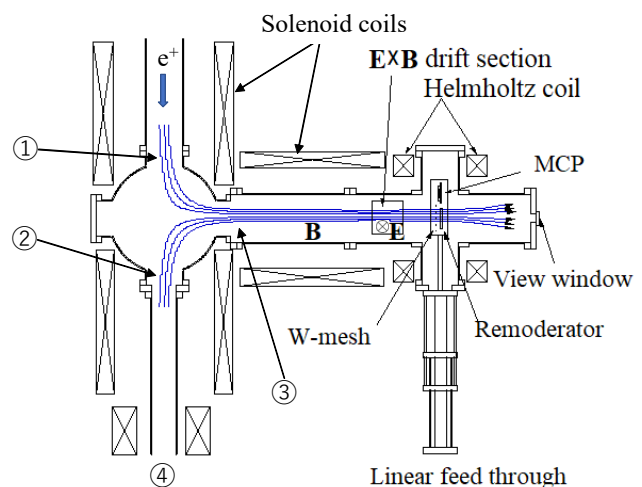


図1 陽電子再放出部

フトも発生する。リモデレータ上にうまく輸送されるようにするため、図1の①の位置に四重極の電場を作り、磁場が合流する前に①の場所では変形を補正するようにしている。また同じ①付近には曲率ドリフトを補正するためのコイルも設置している。一方、下流側の②の場所でも同様に変形を再度修正するための四重極電極とドリフトによる位置調整用のコイルが設置してある。前年度の実験では陽電子ビームがリモデレータに全て入射するように、四重極電場やコイル電流を調整することにより位置及び形状を制御することができた。代表的ビーム像を図2に示す。

今年度リモデレータからの再放出陽電子ビームを下流側に輸送しようとしたところ、図1②の位置の四重極電極に当たってしまい、既設のコイル電流やビームエネルギー、ドリフト電場などの調整を行ったが、四重極電極の中心付近にまでビームを移動させることができなかった。このため再放出ビームの軌道を確認するため新たに粒子軌道計算を行うとともに、軌道を補正するための新たなガイドコイルの設置場所や磁場強度を求めた。実際補助用ガイドコイルの製作も行い、図1③の場所等に設置しビーム軌道の修正を試みたが、まだ四重極の中心付近を通すことがうまくできていない。しかしビーム形状が扁平のままではあるが、一応図1④の位置でビーム径が1 cm程度の陽電子ビーム像を観測することができた。一連の陽電子ビーム像を図2に示す。まだビーム形状が歪んでいるため更なるコイル電流、電場等各種パラメータの調整が必要である。特に図1③の位置に四重極電極やドリフト補正コイルがあり、軌道の修正を難しくしているため、特に四重極電極の位置をもっと下流側に移動する必要がある。今年度陽電子の蓄積実験は可能となったが、陽

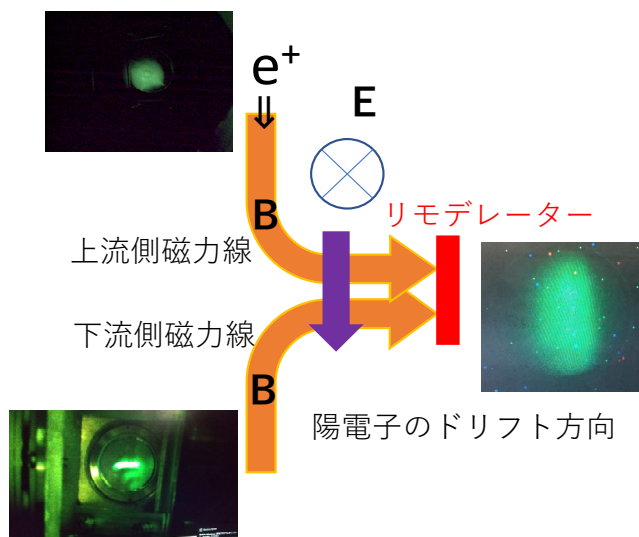


図2 リモデレータ前後での陽電子ビーム像

電子ビーム軌道の調整に時間がかかり、陽電子ビームのパルス化には至らなかった。

3. まとめ

ここ数年、Sバンドライナックを使った陽電子ビームの利用再開を目指して取り組んできたが、特にSバンドライナックの故障が頻発し、陽電子ビームを利用するまでには至らなかった。今回リモデレータからの再放出陽電子量も依然とそんな色ない量が得られていると思われる残念な部分もあるが、諸般の事情により今年度で本研究テーマを終了する。

千葉石に含まれる2種類の有機ラジカルの熱安定性の評価 ～ESR年代測定に向けて～

神戸大学 人間発達環境学研究科^a、岡山理科大学 生物地球学部^b

磯谷舟佑^{a*}、横山優花^a、西戸祐嗣^b、谷篤史^a

Investigation on thermal stability of two organic radicals in chibaite for ESR dating

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University^a,
Faculty of Biosphere-Geosphere Science, Okayama University of Science^b

Shusuke Isogai^{a*}, Yuka Yokoyama^a, Hirotsugu Nishido^b, Atsushi Tani^a

Chibaite, one of silica clathrates, has a framework structure with cage-like voids occupied by guest species. From the result of annealing experiments of untreated chibaite, methyl and *tert*-butyl radicals in chibaite were thermally stable up to 240 °C, meaning that ESR dating could be applicable. A preliminary ESR age of chibaite was estimated to be 65 ± 17 ka, which was not consistent with the expected geological condition of the formation and closure temperature of chibaite. Since the thermal stability of these radicals seems to be affected each other, we need conduct further annealing experiments to obtain accurate total dose of natural radiation for ESR dating of chibaite.

千葉石とは、二酸化ケイ素(SiO₂)がかご状の結晶構造(シリカクラスレート)を形成し、そのかごの中に炭化水素などのガス分子を包接している化合物で¹、天然のガスハイドレート(メタンハイドレートなど)と同様の包接化合物である。天然ガスハイドレート構造II型にあたる結晶構造をもち¹、メタンやエタンに加えて、天然ガスハイドレート構造I型には入らないプロパンやイソブタンといった大きな炭化水素ガスも包接されている。千葉石は、千葉県南房総市荒川の前期中新世の海洋堆積岩層を高角に切るような石英脈から発見され、堆積岩層の形成の後に千葉石は生成されたと考えられているが、千葉石の生成年代についてはよく分かっていない。千葉石には天然の試料にメチルラジカルや*tert*-ブチルラジカルなどのラジカル種が残存していることが示されている²。これらの有機ラジカルを用いて千葉石のESR年代測定ができるかもしれない。

ESR年代測定とは、自然放射線による放射線損傷(欠陥)が蓄積している天然鉱物や化石に対して、人

為的に放射線を照射することにより自然放射線による総被曝線量を評価し、これを線量率で割ることにより天然鉱物や化石の年代値を評価する方法である。ESR年代測定を行うためには、放射線照射線量に対してESR信号がどのように応答するかについて調べなければならない。また、ESR年代の上限は、試料中の欠陥やラジカル種の熱安定性やその量の飽和のしやすさによる。これまでの研究から、千葉石に含まれるメチルラジカルは天然の状態で飽和している可能性があり、*tert*-ブチルラジカルはγ線照射に対してラジカル量が正の相関を示すことが分かっている。しかし、それぞれのラジカルの熱安定性については詳しく分かっていない。よって、本研究は、千葉石の2つの有機ラジカルの熱安定性、および高温域でのラジカル量の増減の観察・評価を行うこと、ならびに千葉石に含まれる有機ラジカルから総被曝線量推定と生成年代の評価を行うこと目的とした。

天然の千葉石を乳鉢で砕き、γ線照射試料1粒と未照射試料1粒を準備した。それぞれ小型電気炉を

* S. Isogai, 203d401d@stu.kobe-u.ac.jp

用いて試料を150-420 °Cの範囲で30 °Cずつ昇温させ、それぞれ15分間ずつ加熱する等時アニーリング実験をし、都度ESR測定を行い、ラジカル種の熱安定性を評価した。次に、天然の千葉石試料2つを用意し、 γ 線照射をそれぞれの試料に5回繰り返し、都度ESR測定を行い、千葉石の総被曝線量を評価した。計測には、Xバンド(9 GHz)ESR分光器を用いた。磁場変調は100 kHz, 0.1 mT, マイクロ波強度は1 mWで測定した。

γ 線未照射試料の等時アニーリング実験の結果をFig. 1に示す。メチルラジカルとtert-ブチルラジカルともに240 °C以降でラジカルが消失することが分かり、これはESR年代測定で使われている石英のAl中心やTi中心の熱安定性と比べても同等の熱安定性であると考えられる³。 γ 線照射によるtert-ブチルラジカルの増加量をFig. 2を示す。この結果からtert-ブチルラジカルを用いて千葉石の総被曝線量を推定したところ、 30 ± 8 Gyであった。千葉石の年間線量率は0.46 mGy/yrと推定され、年代値は、 6.5 ± 1.7 万年と推定された⁴。房総半島南部の平均隆起速度から算出すると^{5,6}、深度100-160 mの位置でラジカルが蓄積され始めたと考えられる。ESR年代測定に使われている石英のAl中心やTi中心の閉鎖温度は80 °C以上であり³、同等の熱安定性があるtert-ブチルラジカルも同様の閉鎖温度を持つと考えられる。千葉石が生成されたと考えられる環境が深度1.5-3.0 kmで温度は50-80 °Cと想定され¹、千葉石の生成のちそのまま隆起したと考えるならば、ラジカルは160 mよりも深い深度から蓄積され始めてもよいと考えられ、今回の結果とは合致しない。

原因としては二つ考えられる。一つ目は、今回の実験では不安定なラジカル種を取り除くためのアニーリング処理をしていないため、不安定なtert-ブチルラジカルが残存している可能性があることである。そのため、低温でのアニーリング処理を行う必要があると考えられる。二つ目は、アニーリング実験の結果から、180-270 °Cでメチルラジカルとtert-ブチルラジカルの量に逆相関があり、ラジカル同士の関係を考慮

する必要があることである。これらの相関関係の原因の一つとしては、ガスハイドレートでは確認されているかご構造のケージ面を介した水素原子移動現象が考えられる。千葉石の年代測定に向けて、より詳細な総被曝線量を評価するために、等温アニーリング実験を進める必要があると考えられる。

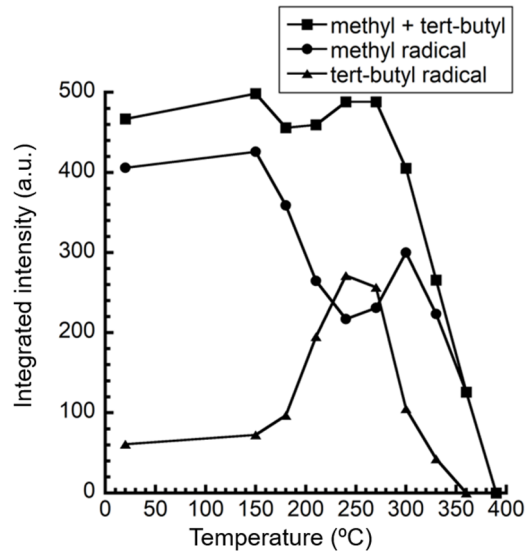


Figure 1 γ 線未照射試料を用いた等時アニーリング実験におけるラジカル量の変化

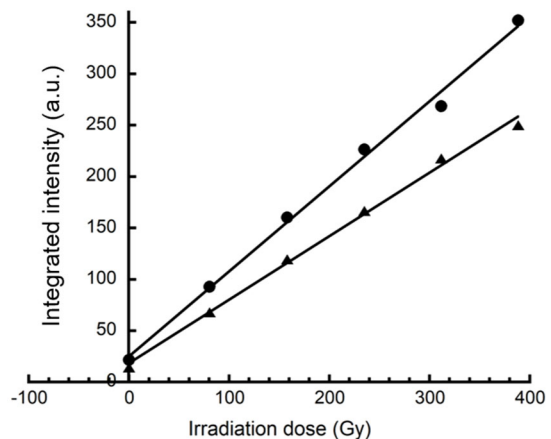


Figure 2 γ 線照射による千葉石のtert-ブチルラジカル量の線量応答性

Reference

- 1) K. Momma *et al.*: *Nature Comm.* 2 (2011) 199.
- 2) 楠木健太: 卒業論文 (2019).
- 3) S. Toyota and M. Ikeya: *Geochem. J.* 25 (1991) 437.
- 4) 松田秀晴と湊進: *Radioisotopes* 48 (1999) 760.
- 5) 中田高 他: *地理学評論* 53-1 (1980) 29.
- 6) 菊池隆男: *第四紀研究* 40 (2001) 267.

核融合炉用超電導磁石絶縁材料の照射効果に関する研究 —極低温照射の影響—

工学研究科 環境・エネルギー工学専攻^a

秋山庸子^{a*}, 國徳祐太^a, 太田明左人^a

Irradiation Effect of Insulating Materials for Fusion Superconducting Magnet
– Effect of Cryogenic Irradiation –

Division of Sustainable Energy and Environmental Engineering, Graduate School of Engineering^a

Yoko Akiyama^{a*}, Yuta Kunitoku^a, Asato Ohta^a

In ITER, the insulating materials of superconducting magnets are used under severe conditions such as electromagnetic force, cryogenic temperature, and radiation environment. Since the polymeric insulating materials show high sensitivity to radiation and becomes embrittled at low temperature, both the mechanical strength and the insulation performance could be decreased. In this study, glass fiber reinforced plastic (GFRP) made of glass cloth and epoxy resin was fabricated, and irradiated with γ -ray at room temperature (RT) and liquid nitrogen temperature (LNT). Then we conducted dielectric breakdown test at RT and LNT to evaluate the irradiation effect at low temperature of GFRP.

1. はじめに

核融合炉用超電導磁石の絶縁材料にはガラス繊維強化プラスチック (glass fiber reinforced plastic, GFRP) とポリイミドフィルムから構成されるハイブリッド複合材料が使用され、高速中性子線 (10^{22} n/m², $E > 0.1$ MeV), 極低温 (4.2 K), 最大 43 MPa 程度の層間せん断応力, 10 kV 以上の遮断電圧等の厳しい環境にさらされる。したがって、絶縁材料には放射線環境下かつ極低温、応力負荷条件で絶縁性能を維持することが求められる。さらに、これらの環境要因は相互に影響するため、これらの影響に対する複合的な影響の評価が必要である。これまでの先行研究では、GFRP やハイブリッド複合材料の様々な照射効果が調査されてきたが、室温で照射した研究がほとんどであり、実使用環境に近い極低温下で照射した実験はほとんど行われていない。

本研究では、ガラスクロスとエポキシ樹脂から成るガラス繊維強化プラスチック (GFRP) を作製し、 γ

線の吸収線量と照射環境 (室温, 液体窒素温度) を変化させ、室温下と液体窒素温度下で絶縁破壊試験を実施した。このことにより、吸収線量と照射温度、低温による絶縁材料の劣化メカニズムについて調査した。

2. 実験方法

ガラスクロスとエポキシ樹脂を用いて GFRP を作製した。この図1の左下に示す形状に加工したのち、⁶⁰Co 線源を用いて、線量率 84 kGy/h, 室温・大気雰囲気中, 液体窒素温度・窒素雰囲気中で γ 線照射することで、試験片に 0, 5, 10 MGy の吸収線量を与えた。これらの試験片を図1に示す試験体系に設置し、電圧を印加することで、室温下と液体窒素温度下で絶縁破壊試験を実施した。電圧印加速度は、0.5 kV/s とし、電流が 1 mA 以上流れた時点で印加を停止した。

また、上記と同じ方法で作製した GFRP を、電子スピン共鳴装置 ESR 測定用に $2.5 \times 2.5 \times 40$ mm の

* Y. Akiyama, 06-6879-7897, yoko-ak@see.eng.osaka-u.ac.jp

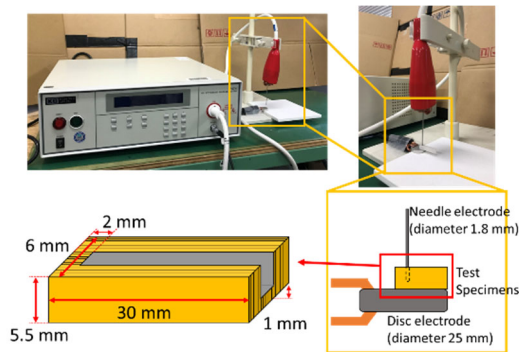


図1 絶縁破壊試験の試験体系

大きさに加工した試験片も作成した。上記と同じ条件で γ 線照射を行い、照射後の試験片に対してESR(JES-RE2X, JEOL)を用いて室温大気雰囲気下でESR測定を実施した。中心磁場は336.0 mT, 測定周波数は9.733 GHz, マイクロ波パワー1.0 mWとした。

3. 結果と考察

図2に絶縁耐力の吸収線量依存性を示す。ここで、 γ RTは γ 線をRTで照射、eLNTは絶縁破壊試験をLNTで実施を示す。RT照射(点線)では、LNT照射(実線)よりも照射により絶縁耐力が増加する傾向を示した。これは、RT照射では架橋反応が促進されて分子密度が増加した一方で、LNT照射では分子運動が制限され、架橋反応よりも分解反応が優位になったことが考えられる。

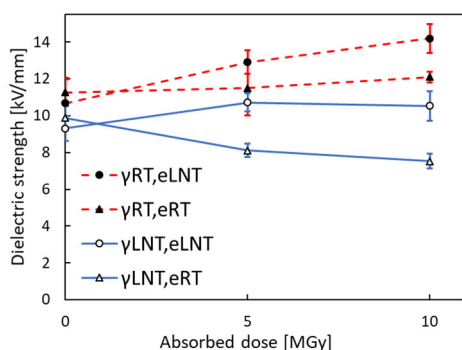


図2 RT・LNT照射した試験片のRT・LNTでの絶縁耐力の吸収線量依存性

一方、絶縁破壊試験温度に着目すると、RTよりLNTのほうが、照射により絶縁耐力が増加した。この原因としては、分解反応で生成した材料中の空隙が、低温による材料の収縮によって埋められたことによって分子密度が増加したことが考えられる。また、LNTでは電子が持つ熱エネルギーが低下するため、絶縁破壊現象を起こすためにより大きな電圧が必要となったことが考えられる。

次に、ESR測定の結果を図3に示す。RT照射では、ラジカル量が吸収線量7MGy付近で極大値を持ち、それ以上では減少する傾向があったのに対し、LNT照射ではラジカル量が比較的少なく、吸収線量の増加に伴って単調に増加する傾向が見られた。このことは、RT照射では高吸収線量で架橋反応が優位となり、LNT照射では高吸収線量で分解反応が優位となることを示唆している。この結果は、絶縁耐力試験において、RT照射のほうがLNT照射に対して絶縁耐力が高かった結果を支持するものである。

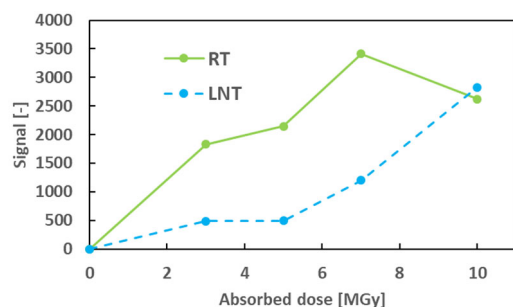


図3 ESRシグナルのピーク強度の吸収線量依存性(RT照射, LNT照射)

4. まとめ

本研究により、照射温度および試験温度により材料の照射効果や性能が大きく異なることが明らかとなり、実際の使用環境である低温下において材料の性能を評価する必要性が示唆された。

今後は、より実際の使用環境に近い液体ヘリウム温度(4 K)において同様の実験を行うことで、低温が材料に与える影響を評価する予定である。

高強度テラヘルツ光照射による分子間相互作用の非線形励起と制御

坪内雅明^a, 誉田義英^b, 永井正也^c, 磯山悟朗^b

^a 量子科学技術研究開発機構, ^b 大阪大学産業科学研究所, ^c 大阪大学基礎工学研究科

テラヘルツ自由電子レーザー(THz-FEL)により発生させた光音響波を高感度で観測するための装置改良を実施した。本装置を生体試料へ適用する前段階として、水・エタノール混合溶液を用いた液体構造と光音響波伝播との関係性を精査した。

【研究目的】

従来、圧電素子等の振動をもとにした液体中での圧力波発生が行われてきたが、近年はレーザー光を用いた光・熱変換に基づく圧力波発生が注目されている。これでは、水に対して透明な可視・近赤外光が用いられてきたが、我々はテラヘルツ(THz)パルス光による水中での圧力波発生を提案した。THz光は水に強く吸収されるため、高効率な光-圧力波変換が水面で直接生じる。また可視光に比べて1%以下の低い光子エネルギーのため、組織損傷のない非破壊的な手法である。本研究では、THz光による気液界面での光音響波発生と水中伝播の観測を行うための装置の高感度化を実施した。

【実施内容】

光源は、大阪大学産業科学研究所のTHz自由電子レーザー(THz-FEL)施設で発生されるTHzパルス列を用い、発生した光音響波をシャドウグラフ法により観測した。その際、光音響波がより可視化しやすいサンプルセルを作成し光音響波観測を試みた。生体試料への適用の前段階として、水・エタノール混合溶液を用いた液体構造と光音響波伝播との関係性を精査し、図1に示すような結果を得た。

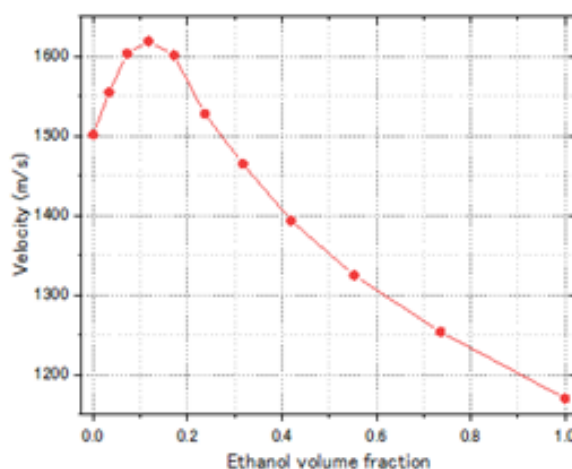


図1：光音響波の水エタノール混合溶液中の速度とエタノール体積分率との関係

【代表的な研究成果】

“Terahertz irradiation effects on the morphology and dynamics of actin biopolymer”, H. Hoshina, S. Yamazaki, M. Tsubouchi, and M. Harata, J. Phys.: Photonics, 3, 034015 (2021).

シンチレーションの前駆励起状態のパルスラジオリシスによる観測

越水正典^a, 室屋裕佐^b, 野上光博^a, 人見啓太郎^a, 藤本裕^a, 浅井圭介^a

^a 東北大学大学院工学研究科, ^b 大阪大学産業科学研究所

放射線検出器として用いられる TlBr における、放射線により生成した電子正孔対の再結合ダイナミクスを、パルスラジオリシスの手法により観測した。パルス電子線の線量を変化させて過渡吸収時間プロファイルを計測した。その減衰挙動は二次再結合により表され、再結合定数も異なるパルス線量の減衰について一致した。

【研究目的】

TlBr はその高い密度と有効原子番号から、ガンマ線の阻止脳が高く、また、適切なバンドギャップエネルギーを有していることから、ガンマ線用の半導体検出器としての開発が進んでいる。一方で、放射線により生成された電子正孔対が TlBr 中でどのような再結合挙動を呈するのか、明らかではない。そこで本研究では、パルスラジオリシスの手法により、電子正孔対の再結合挙動を、パルス電子線の線量を変化させて観測した。

【実施内容】

パルス当たりの線量を変化させてパルスラジオリシス測定を行った。大阪大学産業科学研究所のナノ秒領域での計測システムを利用した。600 nm での過渡吸収時間プロファイルを図 1 に示す。減衰挙動について、二次再結合での減衰を仮定した関数とのフィッティング結果も示す。良好なフィッティング関数が得られた。また、再結合定数として、100 Gy および 250 Gy の場合でそれぞれ、 $2.83 \times 10^8 \text{ cm}^3 \text{ s}^{-1}$ および $2.76 \times 10^8 \text{ cm}^3 \text{ s}^{-1}$ が得られた。これらの値の良好な一致からも、二次再結合であることが明らかである。

【代表的な研究成果】

(Invited talk) M. Koshimizu, S. Yamashita, Y. Muroya, Y. Fujimoto, K. Asai, "Analysis of Excited States Dynamics in Fluoride Crystals Using Transient Absorption Spectroscopy", PACRIM14, 2021 年 12 月 13~16 日, online.

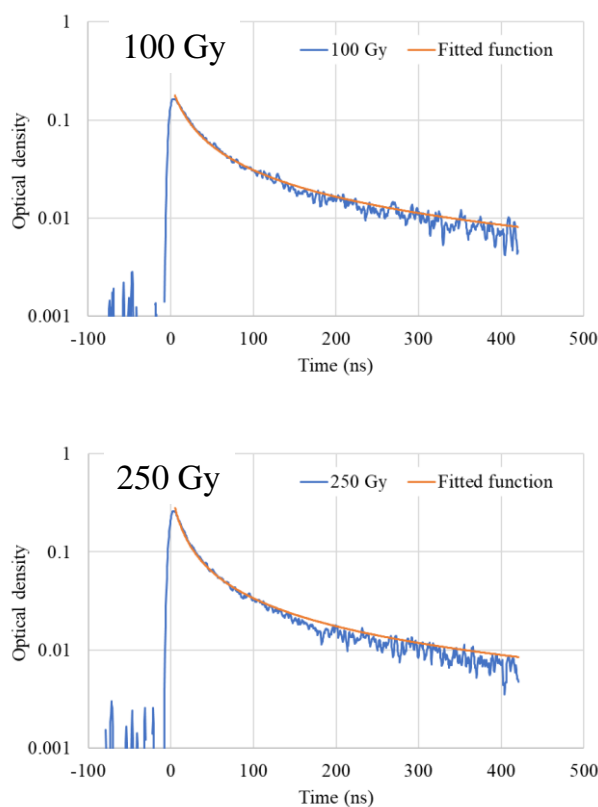


図 1 異なるパルス線量で励起した場合の TlBr の 600 nm の過渡吸収時間プロファイル

パルスラジオリシス法を用いた非均質反応場等での過渡現象に関する研究 ～水の分解ラジカルの反応の塩効果の解明と評価～

永石隆二^a, 桑野涼^a, 伊藤辰也^a, 神戸正雄^b, 楊金峰^b, 吉田陽一^b

^a 日本原子力研究開発機構 廃炉環境国際共同研究センター, ^b 大阪大学 産業科学研究所

福島第 1 原発事故では冷却水に使われた海水中のハロゲン化物が水の放射線分解に影響を及ぼすため、汚染水中の生成物や溶存種の挙動を従来の均一反応計算で解析することは極めて困難である。従って、分解生成物の収量 (G 値) や放射線誘起反応の塩濃度依存性 (塩効果) の評価・解明が急務である。そこで本研究では、電子線パルス (パルスラジオリシス法) による照射を行い、照射直後の不均一領域 (スパー/トラック) で起こる Cl^- による $\cdot\text{OH}$ 捕捉の酸濃度依存性の解明・評価を進めた。

【研究目的】

福島第 1 原発事故では冷却水に「海水」が使われ、その塩分が放射線分解による水素発生や腐食に重大な影響を及ぼすため、分解生成物 (ラジカル・分子) の収量や反応の塩濃度依存性 (塩効果) を解明し、科学的に合理性を有した解析・評価を実現することが急務である。その一環として本課題では、放射線誘起の反応速度の塩濃度 (イオン強度) 補正を実現するために、線形加速器 (LINAC) の電子線を用いたパルスラジオリシス法による過渡反応データ取得を行っているが、今年度は、シンプルな水溶液による海水の再現性確認、 Cl^- による $\cdot\text{OH}$ 捕捉の酸濃度依存性の解明・評価等を進めた。

【実施内容】

これまで、海水に異なる濃度で溶存する 2 つのハロゲン化物イオン ($\text{X}^-: \text{Cl}^-, \text{Br}^-$) が水の分解生成物の水酸化ラジカル ($\cdot\text{OH}$) と 2 段階で反応することを実証し、海水中の水の分解収量等を評価した。ここで、1 段階目の Cl^- の反応は酸濃度依存であるため、放射線エネルギーが付与された不均一領域 (スパー/トラック) は酸性となり、この領域が拡張して均一な状態に至る極短時間内でのみ、この反応が進行する。従って、海水中の溶質との均一反応に関与する分解生成物の収量を高精度に評価・決定するには、照射直後に不均一領域で起こる、この Cl^- の反応を解明・評価する必要がある。

図 1 は海水と同じ Cl^- 濃度の水溶液中で生成した二量体ラジカルイオン $\cdot\text{Cl}_2$ の過渡吸収に及ぼす酸性度 (pH) / 水酸化物イオン (OH^-) の影響を示す。NaOH 添加 (青) で $\cdot\text{Cl}_2$ の吸収は時間とともに減少するが、照射直後は添加の有無でほとんど変化しない。これは、ラジカル $\cdot\text{Cl}$ ($\cdot\text{Cl} + \text{Cl}^- \rightarrow \cdot\text{Cl}_2$) の生成が中和反応 ($\text{H}^+ + \text{OH}^- \rightarrow \text{H}_2\text{O}$: 青の場合は 0.2 ns 以内) より速く起こることを示している、この Cl^- の反応は一般的な反応 ($\text{Cl}^- + \cdot\text{OH} \rightarrow \cdot\text{ClOH}$) とは異なる、熱外反応 (例: $\text{Cl}^- + \cdot\text{H}_2\text{O} \rightarrow \cdot\text{Cl} + \text{H}_2\text{O}$) であると考えられる。

【代表的な研究成果】

熱外反応速度 (拡散動力学計算・収量評価で必須)

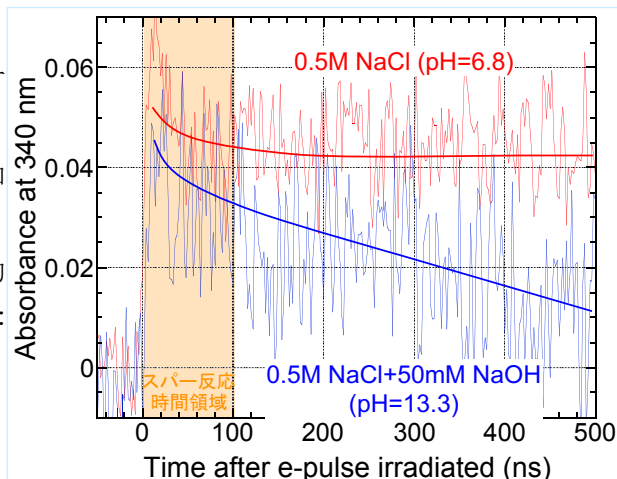


図 1 0.5M NaCl 水溶液中の $\cdot\text{Cl}_2$ ラジカルの過渡吸収 (パルス幅 8 ns, 光路 5 mm, 室温, 空気飽和)

テラヘルツ自由電子レーザーを用いた生体物質の構造改変

川崎平康^a, 中村和裕^b, 入澤明典^{c*}

^a 高エネルギー加速器研究機構加速器研究施設, ^b 群馬大学保健学研究科, ^{c*} 大阪大学産業科学研究所
(*現所属、立命館大学 SR)

テラヘルツ自由電子レーザー (THz-FEL) を用いてアミロイド線維を生体組織の中で破壊する方法を開発することを目的として実施した。 β 2-microglobulin 線維をマウス筋肉に注入した組織切片に対し THz-FEL を照射し、放射光顕微赤外分光法を用いて解析した結果、組織内の β -sheet 由来の赤外吸収ピークが減少し α -helix 由来のピークが増大したことが判明した。

【研究目的】

アミロイド線維とは、タンパク質やペプチドがファイバー型に自己集合して形成され、アルツハイマー病などの難病を引き起こす生体物質である。アミロイド線維を分解する方法はアミロイドーシス疾患の治療技術の開発に結び付くことが期待される。そこでテラヘルツ自由電子レーザー(THz-FEL)を用いてアミロイド線維を生体組織の中で破壊する方法について検討した。

【実施内容】

放射光を光源とした顕微赤外分光法(UVSOR の BL6B)を用い、アミロイド線維を含むマウス組織切片を塗布した基板に対して反射モードで赤外吸収スペクトルのマッピング測定を行った(図1)。その結果、波長 57 μ m の THz-FEL 照射によって β -sheet 構造が減少し α -helix が増大した場所(黒点線)を明確に示すことができた。

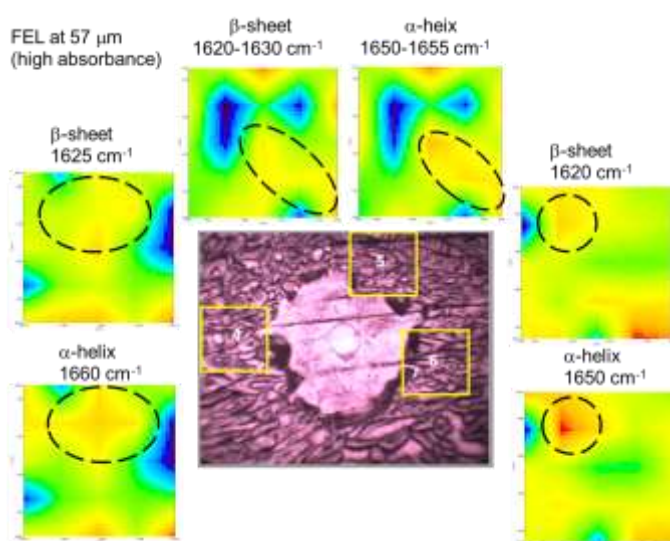


図1 組織切片の放射光顕微赤外分光測定 照射位置周辺3か所(黄色四角)における β -sheet と α -helix の吸収ピークのマッピング解析

【代表的な研究成果】

第35回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム企画講演8
日本赤外線学会誌 Vol. 31, No. 2, 52-59 (2022)

ガンマ線エネルギーの電気エネルギーへの変換 —キャパシタ型ガンマ線電池の開発—

大塚哲平^a, 松岡寛大^a, 藤乗幸子^b

^a近畿大学理工学部電気電子工学科, ^b大阪大学産業科学研究所

鉛板およびアルミニウム板を積層したキャパシタ型 γ 線電池を作製し、 γ 線照射によって生じた電荷を蓄電用コンデンサによって回収した。蓄電用コンデンサの静電容量には γ 線電池に発生した電位に応じて最適な値があることがわかった。また、PHITS シミュレーションにより鉛板とアルミニウム板を100層積層させることで γ 線電池の蓄積電荷性能を向上させることができることを示した。

【研究目的】

γ 線は遮蔽材料との相互作用を繰り返し、多量の低エネルギー電子を生成し、放出する。この際、原子番号が大きい材料ほど γ 線との相互作用を起こしやすく、電子を放出しやすい。この原理を利用し、異種の金属を電極として重ね合わせた状態で γ 線を照射すると、異種金属間の放出電子数の差異が生じ、電位差が生じる。本研究では、これまでに、上記の原理に基づいたアルミニウム (Al) 板と鉛 (Pb) 板とを積層させたキャパシタ型の電池を作製し、外部に蓄電用のコンデンサを並列接続することで、 γ 線照射で生成された電荷を取り出すことに成功した。本年度は、 γ 線電池のAl板/Pb板間に配置した絶縁体の種類、および蓄電用コンデンサの静電容量の大きさが及ぼす充電特性への影響を評価した。

【実施内容】

Al板とPb板(各20cm, 幅10cm, 厚さ300 μ m)を電極とし、電極間に絶縁体としてアクリル(厚さ:300 μ m)、高い耐放射性をもつカプトン(厚さ:125 μ m)を挟んだものを1セルとした。このセルを15個、積層し、Al板およびPb板同士を電氣的に接続し並列接続式 γ 線電池とした。なお、 γ 線電池で発生した電荷を蓄電するためにフィルムコンデンサを γ 線電池に並列に接続した

大阪大学産業科学研究所量子ビーム科学研究施設にて、ペンシル型の ^{60}Co 線源を用いて、照射距離を5cmとして γ 線照射実験を行った。

図1に蓄電用コンデンサの静電容量と蓄積電荷量との関係を示す。ここで、蓄積電荷量 = (蓄電用コンデンサの静電容量) \times (γ 線電池の電位差) である。電極間絶縁体の種類に依らず、蓄電用コンデンサ静電容量が200 μ Fまでは、静電容量の増加に伴い蓄積電荷量が増加した。今回作製した γ 線電池で発生した電荷を十分に蓄電するには、蓄電用コンデンサの静電容量には200 μ F以上が必要であることがわかった。また、蓄電用コンデンサの静電容量が十分に大きい場合は、蓄積電荷量に絶縁体層の影響は見られなかったことから、長期間の利用を考えるのであれば、耐久性の高い絶縁体が望ましいことが示唆された。

【代表的な研究成果】

日本原子力学会, 2021年秋の大会, 2021年9月9日, 講演番号: 2H16

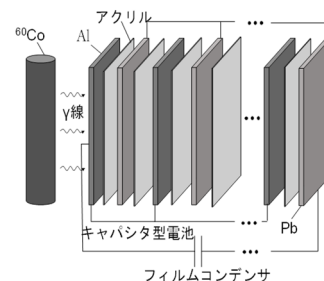


図1 γ 線電池の構成と γ 線照射実験状況

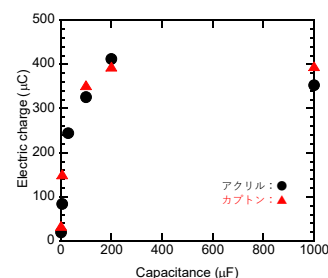


図2 静電容量に対する蓄積電荷量 (15セル)

4. 年間行事報告

4-1 研究会報告

令和3年度量子ビーム科学研究施設研究会

令和3年12月22日(水)に施設研究会がコバルト棟セミナー室とWebexによるハイブリッド開催で行われた。共催：JST 未来社会創造事業「レーザー駆動による量子ビーム加速器の開発とその実証」 / 大阪大学放射線科学基盤機構

- 13:30 開会のあいさつ 阪大産研 細貝知直
- 13:35-14:35 "Cバンド極短パルス電子線型加速器の開発-II 加速器要素開発を中心に"
大竹雄次 (高輝度光科学研究センター(JASRI)・研究プロジェクト推進室
先端加速器技術開発グループ)
- 14:35-14:45 休憩
- 14:45-15:15 "小型パワーレーザーを用いた金属材料の表面改質"
水田好雄 (産研)
- 15:15-15:45 "量子ビーム誘起反応研究と展望"
室屋裕佐 (産研)
- 15:45-16:15 "加速器を用いた化学反応解析の最近の展開"
藤塚 守 (産研)
- 16:15-16:45 "超高速電子線回折と電子顕微鏡への応用の可能性?"
楊 金峰 (産研)
- 16:45-17:15 総合討論
- 17:15 閉会のあいさつ 阪大産研 細貝知直



写真：研究会の様子

4-2 委員会報告

4-2-1 量子ビーム科学研究施設共同利用専門委員会

第 11 回量子ビーム科学研究施設共同利用専門委員会

日時：令和 3 年 7 月 30 日（水）13：30 - 14：00

開催形式：Webex によるオンライン会議

- 1) 令和 3 年度共同利用専門委員について
- 2) 前回議事録の確認
- 3) 令和 3 年度運営体制について
- 4) 令和 3 年度前期共同利用採択状況について
- 5) 令和 3 年度学内兼任について
- 6) 令和 3 年度予算について
- 7) 施設将来構想ワーキンググループの答申について
- 8) 令和 3 年度補正予算（ライナック棟改修）について
- 9) 令和 4-6 年度老朽化対策工事について
- 10) その他

4-2-2 量子ビーム科学研究施設運営委員会

第 42 回量子ビーム科学研究施設運営委員会

日時：令和 3 年 7 月 15 日（木）13:30-14:10

開催形式：Webex によるオンライン会議

- 1) 令和 3 年度運営委員の確認
- 2) 前回議事録の確認
- 3) 令和 3 年度運営体制について
- 4) 令和 3 年度前期共同利用採択状況について
- 5) 令和 3 年度予算について
- 6) 施設将来構想ワーキンググループの答申について
- 7) 令和 3 年度補正予算（ライナック棟の改修）について
- 8) 令和 4-6 年度老朽化対策工事について
- 9) その他

4-2-3 量子ビーム科学研究施設専門委員会

第 148 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 3 年 4 月 2 日（木）10：00 - 10：40

- 1) 概算要求（施設整備）の進捗状況と予算要求に

ついて

第 149 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 3 年 4 月 22 日（木）13：30 - 14：20

- 1) 本年度予算について
- 2) ライナック棟の活用について
- 3) いちょう祭について
- 4) 運営委員会について
- 5) 基盤機構新規教育研究プロジェクトについて

第 150 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 3 年 5 月 20 日（木）13：30 - 14：40

- 1) ライナック棟の活用について
- 2) 改修工事について

第 151 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 3 年 6 月 17 日（木）13：30 - 14：20

- 1) ライナック棟の改修について
- 2) 今後の運営・運用のあり方について
- 3) 令和 4～6 年度施設老朽化対策

第 152 回量子ビーム科学研究施設専門委員会(臨時・メール開催)

日時：令和 3 年 7 月 16 日（金）

- 1) 共同利用期間の変更の可能性について
- 2) 定期検査・定期確認について
- 3) 令和 4-6 年老朽化対策工事について

第 153 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 3 年 7 月 29 日（木）13：30 - 14：15

- 1) ライナック棟改修 WG の検討結果について

第 154 回量子ビーム科学研究施設専門委員会(臨時)

日時：令和 3 年 9 月 9 日（木）15：00 - 16：30

- 1) 概算要求の文科省評価結果について

第 155 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 3 年 9 月 16 日（木）13：30 - 15：30

- 1) 後期テーマ採択
- 2) L バンドマシンタイム配分
- 3) 令和 4-6 年老朽化対策工事の進展

- 4) 今年度予算の見直しについて
- 5) 共同利用機器（ESR など）の整備費について
- 6) 企業等による研究設備利用に関する取扱いについて

第 156 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 3 年 10 月 21 日（木）13：30 - 14：00

- 1) 今年度の研究会・成果報告会について
- 2) L バンド運転者（資格 A）の推薦について
- 3) ライナック棟改修の進捗について
- 4) 追加予算について

第 157 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 3 年 11 月 18 日（木）13：30 - 14：20

- 1) 令和 5 年度概算要求（建屋）について
- 2) 追加予算について
- 3) 来年度の募集について
- 4) ライナック棟 2 階の管理区域解除について
- 5) 兼任教員の転職について
- 6) 施設研究会について

第 158 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 3 年 12 月 23 日（木）13：30 - 14：40

- 1) 予算について（今年度の返還分の使途、来年度予算）
- 2) ライナック棟の改修について
- 3) 来年度の共同利用募集について
- 4) 来年度の非常勤職員について
- 5) 今年度の会計について

第 159 回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和 4 年 1 月 20 日（木）13：30 - 14：30

場所：施設セミナー室

- 1) 放射線管理室の細貝研後任について
- 2) ライナック棟の改修工事について
- 3) 来年度予算案について
- 4) 今年度の会計について
- 5) 成果報告会について

- 6) 令和4年度からの施設長の選任について
- 7) 兼任Bについて

第160回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和4年2月17日（木）15：50－17：00

- 1) テーマ採択について
- 2) 令和4年度のマシンタイム配分について
- 3) 来年度予算案について
- 4) 今年度の会計について
- 5) ライナック棟改修について
- 6) 成果報告会について

第161回量子ビーム科学研究施設専門委員会

日時：令和4年3月17日（木）13：00－13：50

- 1) 運転資格の新設について
- 2) 追加申請の課題について
- 3) 令和4年度予算案について
- 4) 令和4年度いちよう祭について

4-3 見学者リスト (団体)

日時	団体名 (人数)
令和4年3月30日 (水) 14:00-16:00	Manai Science Camp (20名)

4-4 学生実験報告

3Dプリンターによるプラスチック構造体の作製と放射線照射効果の検討 (工学研究科 環境エネルギー工学専攻・秋山准教授)

2021年度は一部対面演習が可能となり、可能な限り対面での実験を実施した。

まず3D CADでの作図指導を行い、学生がそれぞれ作図した

1センチ角、体積分率50%として自由に設計した図面をもとに

3Dプリンターでポリ乳酸 (PLA) 製の成型体を作成し、1MGyのガンマ線照射を行った。

成型体の圧縮試験とFT-IR測定を行い、その解析を行った。

ガンマ線照射だけでなく、エタノールや水酸化ナトリウムでの処理を行って化学処理と放射線照射の影響の比較を行った。

ガンマ線では脆化、エタノールや水酸化ナトリウム処理では軟化する傾向が見られ、

FT-IRの結果と合わせて化学処理と放射線の影響の違いを考察させた。

また学生各自の形状の違いによる圧縮特性の比較を考察させた。

5. 放射線安全管理報告

5-1 放射線安全管理報告

1. 令和3年度放射線業務従事者の登録と教育訓練

産研放射線施設業務従事者に対する教育訓練が下記のとおり行われた。

新規・継続・X線装置使用者・核燃料物質使用者（177名）Web等により実施した。

第一回開催 放射線業務従事者（新規）

日時：2021年5月13日（木）14：00 - 15：30

場所：WEBINAR形式

内容：14：00-14：30 概要と管理状況報告

14：30-15：30 放射性同位元素等の規制に関する法律（RI規制法）と
産研の放射線障害予防規程

参加者：6名

第二回開催 放射線業務従事者（新規）

日時：2021年6月29日（火）13：30 - 15：00

場所：WEBINAR形式

内容：13：30-14：00 概要と管理状況報告

14：00-15：00 放射性同位元素等の規制に関する法律（RI規制法）と
産研の放射線障害予防規程

参加者：2名

第三回開催 放射線業務従事者（新規）

日時：2021年12月1日（水）13：30 - 15：30

場所：産業科学研究所コバルト棟セミナー室

内容：13：30-14：00 概要と管理状況報告

14：00-15：00 放射性同位元素等の規制に関する法律（RI規制法）と
産研の放射線障害予防規程

15：00-15：30 RI施設利用方法の現場説明

参加者：4名

放射線業務従事者（継続）：160名（RIセンター主催教育訓練 大阪大学授業支援システム CLE で受講）

- X線使用者（放射線業務従事者以外）：13名
- 核燃料使用者：5名（安全衛生管理部が実施した講習会）

2. 放射線施設の検査・点検及び補修等

- ライナック、コバルト棟
 - ◇ 点検を令和3年5月11～28日・6月4日、11月25～26日の2回実施し、サムターンカバーの修繕を行った。
 - ◇ 空間線量測定（45箇所）：毎月行いすべて線量限度以下であった。ただし、RF電子銃ライナック関連実験室は7月,11月,12月および令和4年1月に測定を行い、すべての個所で線量限度以下であった。
- 第2研究棟 S114号室
 - ◇ 点検を令和3年5月17日、11月16日の2回実施し、問題はなかった。
 - ◇ 空間線量測定（8箇所）：施設点検実施日に併せて行い、すべて線量限度以下であった。
- 事業所境界
 - ◇ 空間線量測定（10箇所）：毎月行いすべて線量限度以下であった。

3. その他

- 令和4年1月19日に原子力規制庁による立入検査があった。
- 令和4年3月1日に定期検査・定期確認があった。

5-2 電子式個人線量計の校正試験

施設利用者の被ばく線量評価のため、電子式個人線量計（半導体式、以下ポケット線量計）の携帯を義務付けている。被ばく線量の評価にはポケット線量計の示す数値が基になるが、導入から長期間経過しており個体による感度差が広がっている可能性があるため、その精度を改めて調べることにした。

線源には Bi-207 を用い、レーザーポインターを使って線源の中心とポケット線量計の検出部を同一線上に配置した。ポケット線量計は線源表面から 0.5, 1.0, 1.5, 2.0, 2.5 cm の距離に置き、0.5 cm の位置に置いたとき 100 μ Sv 計測する時間を記録し、その時間で他の4点でも計測した。これにより計数量と時間に関する相関、及び距離の逆2乗則に従っていることを確認することができる。計数量の距離に関する依存性は距離の逆2乗に比例し、次のように記述できる。

$$f(x) = \frac{I_0}{(x - X_0)^2} + Y_0$$

ここでxは線源から線量計表面までの距離、 X_0 はセッティング誤差と本体内部の検出部の位置の誤差による係数、 I_0 は照射時間を含んだ感度、 Y_0 はバックグラウンドである。線量分布をこの関数形でフィッティングした結果、上記関数できれいにフィッティングできた。線量計の相対感度を求めるため、バックグラウンドについては0と置いても問題ない程度のばらつきであったため、これを0とし、 X_0 については計数時間ごとに若干ばらつきを示したが、この平均を取ることにし、個体ごとに I_0 を決めることにした。また全個体でフィッティング

の分散を算出し、これの 95%信頼区間を求めることにより分散の大小、すなわち距離の逆 2 乗則に従っているかいないかを判断する。この結果、全 35 台中 10 台のフィッティングの分散が 95%信頼区間から外れることになり、距離の逆 2 乗則に従っていないと言える。しかしこの 10 台の分散を距離別にみても、ある 1 点だけ分散が大きい等、測定の誤差により分散が大きくなってしまったと考えられる結果が多い。従って再現性を再度測定により確認する。

再現性を高めるために測定系の見直しを行った。これまでレーザーポインターを使用して線源中心と線量計検出部の位置合わせを手作業でしていたが、L 字金具や X 軸ステージを利用して、ポケット線量計と線源が常に同じ位置に設置できるような測定系を作った (図 1)。今後はこの測定系でのセッティング誤差を評価していく。

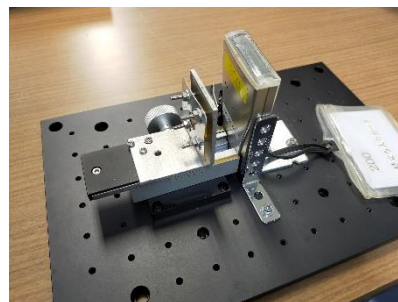


図 1 測定方法

基本的な測定方法は、ポケット線量計と放射線源の距離を変えながら一定の照射時間照射し、照射終了時の測定値を記録する流れである。図 1 のようにブレッドボードにポケット線量計 (ZP-144, Panasonic 製) の寸法に合わせた L 字金具をネジで固定し、ポケット線量計の位置の再現性を高めた固定方法をとる。放射線源も金属板で挟み四隅をネジ止めで固定し、これを 0.1 mm の精度で距離を調整できる X 軸ステージを使用してポケット線量計と放射線源間の距離を変えた。

まずポケット線量計自体の測定値誤差を評価するための測定を行った。ポケット線量計と放射線源との距離を 1.0 cm にして、100 分間連続照射をし、その間 20 分ごとに測定値を記録する。この照射を計 4 回繰り返し、20 分毎の測定値のばらつきを評価した。

次にこの測定体系による誤差を評価するための測定を行った。ポケット線量計と放射線源の距離を 0.5 cm とし、100 μSv カウントする時間を記録する。1 回の測定が終わるたびにポケット線量計を取り外し、再びセットし直す。この測定を計 5 回繰り返し、100 μSv カウントする時間のばらつきを評価した。

次は、ポケット線量計と放射線源の距離 0.5 cm のときに 100 μSv カウントする時間を測り、その時間で他の 4 点 (1.0, 1.5, 2.0, 2.5 cm) の距離でも照射した。

ポケット線量計自体の測定値誤差を評価する測定では、各 20 分間の測定値の平均値が $53.15 \pm 0.99 \mu\text{Sv}$ となり、ポケット線量計の指示値が 1 μSv 単位のため、標準偏差が約 $\pm 1 \mu\text{Sv}$ であることは許容できる誤差の範囲であると言える。また 100 μSv カウントする時間の平均値は 1210 ± 17.65 秒であり、標準偏差を平均値で割った変動係数は 0.0146 である。このことから測定体系による誤差も小さく許容できる範囲であると言える。

次に 5 点の測定点での計測値を次式の形でエクセルのソルバーによるフィッティングを掛

け処理をした。

I_0 は照射時間を含んだ感度係数、 X_0 はセッティング誤差と本体内部の検出部の位置の誤差による係数、 Y_0 はバックグラウンドを示し、本測定では照射時間が短いことから $Y_0 = 0$ とみなせる。フィッティングを掛け求めた $f(x)$ と測定値 y の値を同じグラフにしたものを図 2 に示す。図 2 に示した結果は 33 台のうちの 1 台である 204 番を使用した。測定した 33 台全てにおいて、測定値 y に対してフィッティング関数 $f(x)$ の値がほぼ一致しており、また測定値 y も距離の逆二乗則に従った結果を示している。

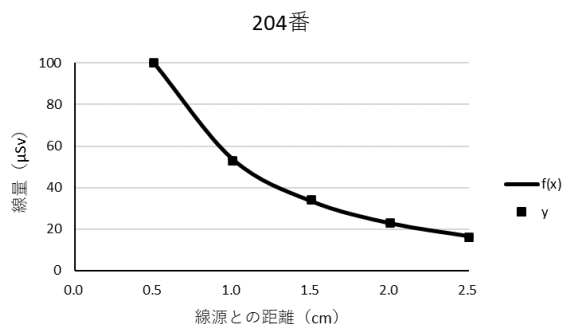


図 2 測定結果の一例

またセッティング誤差と検出器本体内部の検出部の位置の誤差による係数 X_0 に関して、33 台の平均値は $-0.87 \pm$

0.028 cm であり、変動係数は -0.033 となったため、 X_0 のばらつきが小さく測定できていると言える。ここで X_0 が負の値になっているのは、ポケット線量計本体の表面を 0 cm として、放射線源方向が正の値、その反対方向が負の値としているためである。実際の検出部の位置はポケット線量計本体内部に存在しているため、この係数が負の値となる。

照射時間を含んだ感度係数 I_0 を照射時間 t で割れば純粋な感度係数となるため、この計算を行い 33 台分の感度係数 I_0 / t の平均値を求めると、 9.04 ± 0.414 となった。同様に変動係数は 0.046 であり、こちらもまた X_0 と同水準のばらつきの小ささが示された。

これまでの測定結果より、この測定体系は再現性が高くばらつきの小さい信頼性の高い測定方法であるということが示された。また、測定値が距離の逆二乗則に従っていることから、少なくともポケット線量計の感度に多少の違いはあっても、故障が疑われるほど動作が異常である物は無いと思われる。今後、この測定体系の精度で比較校正や機能確認に使用できるかを検討していく必要がある。

6. 研究成果リスト

原著論文

No	論文タイトル	著者氏名	論文掲載誌名, 発行情報
1	Fast Autooxidation of a Bis-Histidyl-Ligated Globin from the Anhydrobiotic Tardigrade, <i>Ramazzottius varieornatus</i> , by Molecular Oxygen	Kazuo Kobayashi, JeeEun Kim, Yohta Fukuda, Takahiro Kozawa and Tsuyoshi Inoue	J. Biochem. 169 663-673(2021 1)
2	Dissolution kinetics of main-chain-scission-type resist in organic developers	Ayako Nakajima, Keiko Matsuo and Takahiro Kozawa	Appl. Phys. Express 14 026501(2021 1)
3	Application of Ethyltrimethylammonium Hydroxide (ETMAH) as an Alternative Developer Solution / Process for Semiconductor Lithography	Julius Joseph Santillan, Masahiko Harumoto, Tomohiro Motono, Andreia Figueiredo dos Santos, Chisayo Mori, Yuji Tanaka, Harold Stokes, Masaya Asai and Toshiro Itani	Jpn. J. Appl. Phys. 60 SCCC01(2021 2)
4	Application of machine learning to stochastic effect analysis of chemically amplified resists used for extreme ultraviolet lithography	Kazuki Azumagawa and Takahiro Kozawa	Jpn. J. Appl. Phys. 60 SCCC02(2021 3)
5	Pattern collapse mitigation by controlling atmosphere during development process for semiconductor lithography	Masahiko Harumoto, Tomohiro Motono, Andreia Figueiredo dos Santos, Chisayo Mori, Yuji Tanaka, Harold Stokes, Masaya Asai, Julius Joseph Santillan, Toshiro Itani, and Takahiro Kozawa	Jpn. J. Appl. Phys. 60 SCCA03(2021 4)
6	Estimation of electron affinity of photoacid generators: density functional theory calculations using static and dynamic models	Kazumasa Okamoto and Takahiro Kozawa	Jpn. J. Appl. Phys. 60 SCCC03(2021 4)

No	論文タイトル	著者氏名	論文掲載誌名, 発行情報
7	Effect of initial molecular weight distribution on pattern formation of main-chain-scission-type resists	Ayako Nakajima, Manabu Hoshino and Takahiro Kozawa	Jpn. J. Appl. Phys. 60 056501(2021 4)
8	Dependence of dose rate on the sensitivity of the resist under ultra-high flux extreme ultraviolet (EUV) pulse irradiation	Kazumasa Okamoto, Shunpei Kawai, Yuta Ikari, Shigeo Hori, Akihiro Konda, Koki Ueno, Yohei Arai, Masahiko Ishino, Thanh-Hung Dinh, Masaharu Nishikino, Akira Kon, Shigeki Owada, Yuichi Inubushi, Hiroo Kinoshita and Takahiro Kozawa	Applied Physics Express 14 066502 (2021 5)
9	Analysis of dissolution kinetics of narrow polydispersity poly(4-hydroxystyrene) in alkaline aqueous solution using machine learning	Naoki Tanaka, Kyoko Watanabe, Kyoko Matsuoka, Kazuki Azumagawa, Takahiro Kozawa, Takuya Ikeda, Yoshitaka Komuro and Daisuke Kawana	Jpn. J. Appl. Phys. 60 066503(2021 5)
10	Electron Beam Irradiation of Lead Halide Perovskite Solar Cells: Dedoping of Organic Hole Transport Materials despite Hardness of the Perovskite Layer	Yoshiyuki Murakami, Fumitaka Ishiwari, Kazumasa Okamoto, Takahiro Kozawa and Akinori Saeki	ACS Applied Materials & Interfaces 13 24824-24832(2021 5)
11	Study on radical dianions of carboxylates used as ligands of metal oxide nanocluster resists	Kengo Ikeuchi, Yusa Muroya, Takuya Ikeda, Yoshitaka Komuro, Daisuke Kawana and Takahiro Kozawa	Jpn. J. Appl. Phys. 60 076503(2021 6)
12	Resist Thickness Dependence of Latent Images in Chemically Amplified Resists Used for Electron Beam Lithography,	Takahiro Kozawa and Takao Tamura	J. Photopolym. Sci. Technol. 34 17-25(2021 6)

No	論文タイトル	著者氏名	論文掲載誌名, 発行情報
13	Non-chemically Amplified Negative Molecular Resist Materials using Polarity Change by EUV Exposure,	K. Fujisawa, H. Maekawa, H. Kudo, K. Okamoto, and T. Kozawa,	J. Photopolym. Sci. Technol. 34 87-93(2021 6)
14	Analysis of mitigating factors for line edge roughness generated during electron beam lithography using machine learning	Yuqing Jin, Takahiro Kozawa and Takao Tamura	Jpn. J. Appl. Phys. 60 076509(2021 7)
15	Theoretical study of interfacial effects on low-energy electron dynamics in chemically amplified resist processes of photomask fabrication	Takahiro Kozawa and Takao Tamura	Jpn. J. Appl. Phys. 60 086503(2021 7)
16	Scavenging of "dry" electrons prior to hydration by azide ions: Effect on the formation of H ₂ in the radiolysis of water by ⁶⁰ Co γ -rays and tritium β -electrons.	Sunuchakan Sanguanmith, Jintana Meesungnoen, Yusa Muroya and Jean-Paul Jay-Gerin	Can. J. Chem. 99 881-889(2021 6)
17	γ -Radiation synthesis of ultrasmall noble metal (Pd, Au, Pt) nanoparticles embedded on boron nitride nanosheets for high-performance catalysis	Yi Wang, Jialiang Chen, Lan Wang, Hanqin Weng, Zhihao Wu, Limin Jiao. Yusa Muroya, Shinichi Yamashita, Sheng Cheng, Fuhai Li, Hongbing Chen, Wei Huang and Mingzhang Lin	Ceramics International 47 26963-26970(2021 10)
18	Relationship between blurring factors and interfacial effects in chemically amplified resist processes in photomask fabrication	Takahiro Kozawa and Takao Tamura	Jpn. J. Appl. Phys. 60 126504(2021 12)

No	論文タイトル	著者氏名	論文掲載誌名, 発行情報
19	Relationship between surface free energy and development process (swelling and dissolution kinetics) of poly(4-hydroxystyrene) film in water and 2.38 wt% tetramethylammonium hydroxide aqueous solution	Yuko Tsutsui Ito and Takahiro Kozawa	Jpn. J. Appl. Phys. 61 016502(2021 12)
20	Formulation of trade-off relationships between resolution, line edge roughness, and sensitivity in sub-10 nm half-pitch region for chemically amplified extreme ultraviolet resists	Takahiro Kozawa	Jpn. J. Appl. Phys. 61 016501(2021 12)
21	Photo- & radio-chromic iron-doped tungstic acids fabricated via submerged photosynthesis	Shuntaro Murakami, Lihua Zhang, Melbert Jeem, Kazumasa Okamoto, Yuki Nakagawa, Tamaki Shibayama, Masato Ohnuma, Seiichi Watanabe	Optical Materials 124 111966(2022 1)
22	Fabrication of color-toned micro/nanopattern surface by submerged photosynthesis method	Jumpei Tsukamura, Yuki Takahashi, Lihua Zhang, Melbert Jeem, Kazumasa Okamoto, Seiichi Watanabe	Microelectronic Engineering 256 111727(2022 2)
23	Effects of film thickness and alkaline concentration on dissolution kinetics of poly(4-hydroxystyrene) in alkaline aqueous solution	Naoki Tanaka, Kyoko Matsuoka, Takahiro Kozawa, Takuya Ikeda, Yoshitaka Komuro and Daisuke Kawana	Jpn. J. Appl. Phys. (2022)
24	Decarboxylation efficiency of carboxylic acids as ligands of metal oxide nanocluster resists upon γ -ray irradiation	Tomoe Otsuka, Yusa Muroya, Takuya Ikeda, Yoshitaka Komuro, Daisuke Kawana and Takahiro Kozawa	Jpn. J. Appl. Phys. 61 036503(2022 3)

No	論文タイトル	著者氏名	論文掲載誌名, 発行情報
25	Classification of lines, spaces, and edges of resist patterns in scanning electron microscopy images using unsupervised machine learning	Yuqing Jin and Takahiro Kozawa	Jpn. J. Appl. Phys. (2022)
26	Effect of surface free energy of organic underlayer on dissolution kinetics of poly(4-hydroxystyrene) film in tetramethylammonium hydroxide aqueous developer	Tomoe Otsuka, Yuqing Jin, Naoki Tanaka, and Takahiro KOZAWA	Jpn. J. Appl. Phys. (2022)
27	Interdomain Electron Transfer in Flavohemoglobin from <i>Candida norvegensis</i> with Antibiotic Azole Compounds	Kazuo Kobayashi, Jotaro Igarashi, and Takahiro Kozawa	FEBS Letters (2022 3)
28	Electron Beam Chirp Dexterity in Staging Laser Wakefield Acceleration	N. Pathak, A. Zhidkov and T. Hosokai	the Physics of Plasmas 28 5 053105(1-10)(2021 5)
29	サブナノ秒マイクロチップレーザーによるレーザーピーンフォーミングの変形特性	鷺坂芳弘、川崎泰介、Vincent YAHIA、平等拓範、佐野雄二	塑性と加工（日本塑性加工学会論文誌） 62 720 8-13(2021 1)
30	Effects of Laser Peening with a Pulse Energy of 1.7 mJ on the Residual Stress and Fatigue Properties of A7075 Aluminum Alloy	Yuji Sano, Kiyotaka Masaki, Yoshio Mizuta, Satoshi Tamaki, Tomonao Hosokai and Takunori Taira	Metals 11 11 1-9(2021 10)
31	Effect of Laser Peening with a Microchip Laser on Fatigue Life in Butt-Welded High-Strength Steel	Tomoharu Kato, Yoshihiro Sakino, Yuji Sano	Applied Mechanics 2 4 878-890(2021 2)
32	Development of a portable laser peening device and its effect on the fatigue properties of HT780 butt-welded joints	Yuji Sano, Tomoharu Kato, Yoshio Mizuta, Satoshi Tamaki, Koki Yokofujita, Takunori Taira, Tomonao Hosokai, Yoshihiro Sakino	Forces in Mechanics 7 - 100080-100086(2022 2)
33	Effect of pulse group velocity on charge loading in laser wakefield acceleration	N. Pathak, A. Zhidkov and T. Hosokai	Physics Letters A 425 j.physleta.2021 127873(1-7)(2021 11)

No	論文タイトル	著者氏名	論文掲載誌名, 発行情報
34	Experimental demonstration of 7-femtosecond electron timing fluctuation in laser wakefield acceleration	Kai Huang, Zhan Jin, Nobuhiko Nakanii, Tomonao Hosokai and Masaki Kando	Applied Physics Express 15 3 (2022 2)
35	Time-domain measurement of coherent transition radiation using a photoconductive antenna with micro-structured electrodes	K. Kan, M. Gohdo, J. Yang, I. Nozawa, Y. Yoshida, H. Kitahara, K. Takano, R. Kuroda, H. Toyokawa	AIP ADVANCES 11 12 (2021 12)
36	Longitudinal and transverse spatial beam profile measurement of relativistic electron bunch by electro-optic sampling	Masato Ota, Koichi Kan, Soichiro Komada, Yasunobu Arikawa, Tomoki Shimizu, Valynn Katrine Mag-usara, Youichi Sakawa, Tatsunosuke Matsui, and Makoto Nakajima	Applied Physics Express 14 2 026503(2021 1)
37	Optimization of a B4C/graphite composite energy degrader and its shielding for a proton therapy facility	Zhiyuan Mei, Kuanjun Fan, Zhikai Liang, Jinfeng Yang, Mingwu Fan	Nuclear Instrument and Methods in Physics Research, A 995 165127(2021 2)
38	相対論的フェムト秒パルス電子顕微鏡の開発	楊 金峰, 保田 英洋, 吉田 陽一	加速器 18 3 81-88(2021 7)
39	Magnetic Domain Control of ErFeO3 by Intense Terahertz Free Electron Laser Pulses	M. Nakajima, G. Isoyama, and T. Kurihara	IEEE Transactions on Plasma Science 49 3344-3350(2021 11)
40	Examining features of radiation-induced damage to PADC observed using FT-IR analysis: Radiation tolerance of methine groups at three-way junctions	T.Kusumoto, M. Kanasaki, I. Ishikawa, R. Barillon, Y. Honda, S. Tojo, S. Kodaira and T. Yamauchi	Radiation Measurements 147 106645(2021 9)
41	Electronic and Structural Properties of 2,3-Naphthalimide in Open-Shell Configurations Investigated by Pulse Radiolytic and Theoretical Approaches	B Zhuang, S Tojo and M. Fujitsuka	ChemistrySelect Vol. 6 No. 14, pp. 3331–3338 (2021)

No	論文タイトル	著者氏名	論文掲載誌名, 発行情報
42	Stacked thiazole orange dyes in DNA capable of switching emissive behavior in response to structural transitions	Tadao Takada, Koma Nishida, Yurika Honda, Aoi Nakano, Mitsunobu Nakamura, Shuya Fan, Kiyohiko Kawai, Mamoru Fujitsuka, and Kazushige Yamana	ChemBioChem Vol. 22 No. 17, pp. 2729–2735 (2021).
43	A cyanine dye based supramolecular photosensitizer enabling visible-light-driven organic reaction in water	Hajime Shigemitsu, Tomoe Tamemoto, Kei Ohkubo, Tadashi Mori, Yasuko Osakada, Mamoru Fujitsuka, and Toshiyuki Kida	Chemical Communications Vol. 57 No. 85, pp. 11217–11220 (2021)
44	One-pot synthesis of long rutile TiO ₂ nanorods and their photocatalytic activity for O ₂ evolution: comparison with near spherical nanoparticles	Suzuko Yamazaki, Masanari Kutoh, Yukari Yamazaki, Nanami Yamamoto, and Mamoru Fujitsuka	ACS Omega, Vol. 6 No. 47, pp. 31557–31565 (2021)
45	Effects of Bi-dopant and co-catalysts upon hole surface trapping on La ₂ Ti ₂ O ₇ nanosheet photocatalysts in overall solar water splitting	Xiaoyan Cai, Liang Mao, Mamoru Fujitsuka, Tetsuro Majima, Sujan Kasani, Nianqiang Wu, and Junying Zhang	Nano Research, Vol. 15 No. 1, pp. 438–445 (2022)
46	Single-molecule fluorescence kinetic sandwich assay using a DNA sequencer	Kiyohiko Kawai and Mamoru Fujitsuka	Chemistry Letters Vol. 51 No. 2, pp. 139–141 (2022)
47	Enhanced photocatalytic activity of porphyrin nanodisks prepared by exfoliation of metalloporphyrin-based covalent organic frameworks	Xinxi Li, Kota Nomura, Arnaud Guedes, Tomoyo Goto, Tohru Sekino, Mamoru Fujitsuka, and Yasuko Osakada	ACS Omega, Vol. 7 No. 8, pp. 7172–7178 (2022)

総説

No	タイトル	著者氏名	掲載誌名, 発行情報
1	COF-based photocatalyst for energy and environment applications	Xinxi Li, Kiyohiko Kawai, Mamoru Fujitsuka, and Yasuko Osakada	Surfaces and Interfaces, Vol. 25, pp. 101249 (2021)

7. 量子ビーム科学研究施設員名簿

施設長(兼)	細貝 知直	教授	量子ビーム物理研究分野
専任	誉田 義英	准教授	
	藤乗 幸子	助教	
	磯山 悟朗	特任教授	
	徳地 明	特任研究員	
	藤田 奈々美	事務補佐員	
	古川 和弥	技術職員	技術室
	福井 宥平	技術職員	技術室
兼任	吉田 陽一	教授	ナノ極限ファブリケーション研究分野
	楊 金峰	准教授	ナノ極限ファブリケーション研究分野
	菅 晃一	助教	ナノ極限ファブリケーション研究分野
	神戸 正雄	助教	ナノ極限ファブリケーション研究分野
	細貝 知直	教授	量子ビーム物理研究分野
	金 展	准教授	量子ビーム物理研究分野
	藤塚 守	教授	励起材料化学研究分野
	川井 清彦	准教授	励起材料化学研究分野
	小阪田 泰子	准教授	励起材料化学研究分野
	LU CHAO	助教	励起材料化学研究分野
	古澤 孝弘	教授	量子ビーム物質科学研究分野
	室屋 裕佐	准教授	量子ビーム物質科学研究分野
	岡本 一将	助教	量子ビーム物質科学研究分野
	小林 一雄	特任教授	量子ビーム物質科学研究分野

(R4年3月現在)